

108  
M  
7

備前軍記



108  
27

備前軍記卷第一目錄

備前國守護并赤松家興廢の事

山名教之備前國守護の事

次郎法師再赤松家を起す事

赤松政則元服并備前國へ打入事

備前勢京都軍の事

赤松政則播州歸國并備前一宮社參の事

松田左近將監赤松お叛く事

福岡合戦の事

文應十六年正月より日福岡合戦の事

福岡落城の事

松山左近將監の事

政則再播劔下向の事

政則卒去の事

浦上宗助と松田と合戦の事





赤松臣兩浦上權を争ひ合戦の事  
宇喜多能家矢津牧石勇戦の事  
浦上則宗病死同村宗赤松も叛く事  
三石城攻の事  
赤松の陣へ夜討の事

備前軍記卷第二目錄

浦上宗久小塩へ内通并八塔寺炎上の事  
赤松政村再三石城を攻る事  
小寺と宇喜多作州合戦の事  
赤松政村入道して小鹽退去の事  
義晴將軍播州より上洛并常印小塩へ歸り弑らる事  
赤松左京大夫政祐小塩へ歸り住する事  
宇喜多能家父子播州へて勇戦の事  
播州依藤ヶ城を攻并柳本彈正被殺事  
浦上村宗攝州出陣并討死の事

赤松晴政歸陣并浦上村宗の子二人の事  
宇喜多常致を島村殺す并宇喜多家の事  
備前國所々城主并海賊の事  
宇喜多八郎直家生立浦上宗景へ仕る事  
富川平助宇喜多直家に仕る事  
雲州の尼子作州へ出張の事  
直家砥石城を攻并落城の事  
馬場次郎四郎宇喜多直家に仕る事  
飽浦加地を討并加地兒島を退く事  
浦上宗景と尼子晴久と作州合戦の事

備前軍記卷第三目錄

中山備中島村貫阿彌を宇喜多討取事  
根所元常を討取并龍口城落る事  
浦上政宗父子生害并清宗殺さるゝ事  
宇喜多と松田和陸并三村家親備前へ働く事



三村家親作州へ働井馬場高名の事

三村再作州働き井家親討る、事

三村五郎兵衛紀伊守の弔合戦討死の事

宇喜多と毛利家和睦の事

澤田村明禪寺城落城の事

明禪寺合戦備中勢敗軍の事

金光須々木中島等宇喜多へ降参の事

宇喜多備中國へ働の事

宇喜多尼子に組する事

宇喜多松田を討ち金川落城の事

宗景勢と宇喜多勢と片上せり合の事

宇喜多備中齊田城後攻の事

尼子勢と毛利勢と作州合戦宇喜多勢加勢の事

出雲國秋上綱平備中働井毛利勢働出る事

宇喜多金光與次郎宗高を殺す事

備前軍記卷第一

備前國守護并赤松家興廢の事

土肥 經平 著  
山田 貞芳 校訂

後鳥羽院の朝庭を治元年は鎌倉右大將頼朝卿日本總追捕使を下されしより諸國に國司の外に守護地頭を置く逆乱を静めらるるそれより前元暦元年に梶原平三景時土肥次郎實平備前國に下りて守護せし事或は佐々木三郎盛綱兒嶋の地を給りて其氏族來り住せし事共は聞わられたるも他浦加地鎌倉の時誰備前の守護職たりし事未詳其後京都將軍のはしめ文和四年に備前國の守護職を赤松律師則祐お賜し時其身は播州白旗城にありて其後浦上掃部助宗隆を備前國三石城に置て當國を治めしは應安四年十一月廿九日に則祐白旗城を卒す其子上総介義則續て國を治む是も應永四年九月廿日卒す其子左京大夫滿祐まで三代なりけるも此滿祐義致將軍をうらむる事ありて逆心し嘉吉元年六月廿四日京都にて將軍を弑し播州を歸り白旗城に楯籠ける時京都より討手として山名終理大夫義理同相摸守教之同左衛門佐持豊細川讚岐守持常等播州に發向して白旗の城を攻て九月十日落城



し満祐以下自殺し赤松家三代にして亡ひ失ぬ

山名教之備前國守護の事

嘉吉元年赤松満祐を討たる功によりて備前國をば相摸守教之に賜りければ其國に下り赤松か殘黨を尋搜し國中を追補して是を誅し又降人となる者をは所知を與へて臣とす小嶋大和守を邑久郡福岡に置て備前國を治めしむ三石城主たりし浦上四郎宗安掃部助は白旗城にて赤松と與に戦死す其子はいまた幼若なりしを其後民間にかくし置ぬ後に浦上美作守則宗といふ是也其外松田宇野難波などいふも浪士となりて國中おかくれ居て時の至を待ければ暫く無異に属しぬとあるに嘉吉三年七月廿八日故赤松満祐甥赤松二郎則重西國に漂泊してありしか備中に蜂起し故の家人を催し集め備前へ打入へさよし聞へければ山名相摸守福岡の小嶋大和守に下知して是を討しむ則重勇士なりけれども俄の集り勢なりければ一戦に打負備中の水田にて自害して失にけり又満祐か嫡子彦二郎教祐二男彦五郎則尙は白旗落城の時満祐下知してひそかに白旗城を落しけるか山野に身を隠して道をくらまし南朝へ参り仕へ左馬助教祐と稱しけるか文安五年南朝ものこりなく亡ひければ爰をも出て漂泊せしに其比山名宗全將軍の御勸氣を蒙て熱居

しければ此時を幸なりと思ひはかり細川讃岐守成之を頼みて教祐則尙兄弟の者身の科を御免あらは逆臣山名宗全を討て参らすへさよし訴へ申ければ御免の事ありて播州へ馳下りかくれ居たる舊臣を駆促して大田垣大炊助等を討て但馬へ押入宗全を討んと擬しけるに宗全是を聞とひとしく兵を帥て播州へ打出て防戦しければ忽に赤松兄弟打負て逃去ける伊勢國司は教祐か縁者たる故是を頼みて暫寄宿せしか武家よ聞えて教祐誅伐せらる則尙は兒嶋へ落行けるを猶敵追懸ければ其所をも立去て高麗へ押渡りかの國の王に交へて處々合戦に功ありて國王是を感し次第に昇進すへかりけるを頻に骸骨を乞て日本に歸り播州の側に忍て居けるか此よし洩聞えて京都より討手下りければ河内國へ逃けるか終に太子にて自害し失にける

次郎法師再赤松家を起す事

文安五年南朝の宮を討率り又楠二郎等も戦死して悉く征伐ありし如く見えければとも猶文安元年に奪取率りし神璽を捧て新帝を立奉り殘黨集りて南朝を守護し奉りける爰に故赤松満祐か家僕石見太郎左衛門といふ者流浪して諸國にかくれ居けるか満祐か子共等までみな殺されて赤松の家絶ぬる事を深く愁て思慮を回



し京都み出て三條右大臣實景の家に便を得てまいり仕へ赤松家先祖入道圓心より代々將軍家へ忠を竭せし事どもとのついでに物語どもなして再ひ赤松の家の起らん事を望ければ三條右府も是を憐て嘉吉に滿祐入道か大逆をあかなふ程の忠などあらは愁訴をとりはかるふへしと仰ありければ石見蒼若南朝に赴て新帝を嘗し奉り神璽を奪取て朝廷にかへし入奉らんにはいか、と申窺ければ右府もけにも然へからんとをほして是をとの次てに武家へ歎き玉ひければ勅命によるへきよし蒼玉ひける故やかて奏聞に經られければ神璽御歸座の事あらは赤松赦免の事子細あらしと給命ありければ是を内へ石見に語給ひけるは太郎左衛門大に悦て赤松か一族眞嶋某其家僕中村彈正等十余人相議して南朝へ赴き便を得て言上しけるは主人赤松か一類將軍家に亡され鬱憤深く候へは南朝に仕へ奉候元來將軍家は南帝の朝敵めて候へは南朝の威光をかり奉て主人の讎將軍家を一度討取り公私の讎を報し皇居を京都へなし奉らば其恩賞に赤松の家を立給ひ本領塔の事を望み候よし實々敷申ける皇居も吉野の奥地山と申所に最幽なる御住居なれば卒爾に御許容あり實おも又普廣院將軍は赤松家讎敵まされなければ其臣として宿意をふかく思ふへき事なれば南方へ二心あるへしと御心安く召

つかはれ月日を経て脆近し奉りければ間嶋中村ますましぬと悦て長録元年十二月二日大雪ふりて靜なる夜寢殿へ恐ひ入一宮を以丹生屋帶刀左衛門同四郎左衛門兄弟討奉り二宮を以中村彈正討奉り神璽をも奪得て出けるに吉野十八郷の者ども起りて追かけ丹生屋兄弟中村彈正を討取り神璽も取かへして歸りける其後猶赤松が浪人小寺藤兵衛間島等計をめぐらし和州越智といふ者又郷民等をかたらしひ明る長録二年八月ふ難なく神璽を奪得て中村間島等三條殿へ參り此由を申ければ將軍へ申し奏聞を経て八月晦日神璽禁中へかへり入奉りければ叡威斜ならず諸臣も天下泰平を賀し奉るさて今度勳功の賞よりて赤松が浪人願ふ所の赤松次郎法師と云けるを御免を蒙り召出され加賀半國備前國新田庄出雲國宇賀庄伊勢國高宮保を下し給はる櫻雲記には神璽を取返し奉る此次郎法師の祖父は嘉吉の滿祐が弟にて伊豫守義雅といふ兄ととも白旗にて生害す此義雅に九歳の子ありしを建仁寺の大昌院天隱和尚隠し養ひて弟子とし性存坊勝岳といひし後還俗し時勝といふ次郎法師は此時勝の子なり此次郎法師召出されしかば播州備前所々に隠れ居たりし舊臣ども追々に馳集て先此度賜りし和氣郡新田庄を取敷べきため宇野上野入道を大將として兵士七八十人計馳集り寛正元年六月十



九日三石宿小着陳す福岡より此事聞えければ山名の家臣足達庄左衛門尉を首として三石近く陳取て赤松勢を防ぐ赤松方は猶國士馳集りて百余騎になりて戦ひけるよ遂に山名勢打負大將足達庄左衛門を赤松が兵難波十郎兵衛行豊討捕り勝鬨をあけて新田庄へ人數を引取其邊和氣村伊里中村弓削村新庄村吉原村田土村以上七ヶ村を收めける其後赤松士此所にありて福岡の山名勢と戦ふ事しばらくなりしに赤松方毎度利を得ければ次郎法師より諸士へ威狀等を出して其功を賞せられし其狀とも今民間に傳えて存するものあり

## 赤松政則元服并備前國へ打入事

寛正三年十一月廿六日赤松二郎法師十一歳ふて元服あり任官して將軍の御諱の一字を賜り赤松左京大夫政則と名乗る未若年なれども威儀禮容すくれたる生つきにて世に賞美しけるそれより程なく應仁元年の春より細川右京大夫勝元と山名宗全と權をあらそひて京都に軍起りて諸家立はかれ兩家に属して相戦ふ其時左京大夫政則は十六歳にて無二の細川方なりしか赤松の舊國播州備前へ罷下り譜代恩顧の侍を集め其國を切したかへ大勢を卒して上洛すへしと約束して京都を打立五月十日播州へ着陳し兵を二手に分て所々の城堡を攻取り山名が家人を

追拂ひ漸國中を取敷備前國へ押入けるに福岡の山名が臣小嶋大和守以下是をき、急ぎ兵をかり集めて六十余人三石境へ行向て防戦す赤松左京大夫愛にても兵を二手に分一手は自ら大將となりて三石口より攻入一手は浦上美作守宇野上野介を大將として船手より押寄其上に備前國元來赤松の國なりければ政則入國を悦び民間にかくれし兵士時を得て鹿田菅の一族隊長となりて一揆を起し福岡へ打入是を攻む松田權守も浪人にて居たりしか打て出で新田の庄をとり固め福岡へ寄んどす又此時難波十郎兵衛行豊は小嶋大和守を引出して討取べしと思ひて十郎兵衛少兄掃部介は大和守か家來にて此時福岡に居たりしを幸に内通し何ぞ謀を以て小嶋を引出すべしと言送りければ掃部助領承し小嶋も謀ていひけるは愛にて敷をさへ給はる事此不勢にては叶候まじ一先作州へ立越給ひ味方お謀し合せて戦給へといさむ小嶋は内通ありとはえらす掃部少申所の謀まかるへしとて郎等少く引連て磐梨郡を経て作劔へ行く十郎兵衛兼て思まうけし事なれば掃部助一族をかたらひ其途中へ出で小嶋を討小嶋は不意を討れて郎等等十余入討死すされども大和は覺ある士なりければ度々返合ては戦ひ戦ひては引取しで難なく美作へ落行ける福岡に残りし山名士どもは鹿田菅一族共攻入て討取



ければ左京大夫政則思ふまゝに打入時日をうつさず備前國を取敷き國侍せよの  
此度の勳功を正されけるに鹿田菅の一族は福岡を攻取り山名侍等を討取事全く  
己が功也といふ又難波播磨助同十郎兵衛兄弟沼田越中入道は小嶋を謀を以引出  
したる故あ即時に福岡をも攻取たれば其功己にありと争ひたるを政則是を聞と  
もよ是を譽て恩賞をあたへ其外勳功の侍に褒美どもありて昔のごとく三石城を  
築て浦上則宗を置守護代とし松田權守元隆も以前のこどく居福郷を領して八幡  
山といふ富山の城を築て是に置て備中を押へ國中を治め是より作州へ打入べき評  
議せし所へ京都細川右京大夫勝元より飛脚到來して京都の軍甚だ急なる間早々  
上洛して加勢あるべきよし申來りければ備前の留守居に浦上則宗松田元隆等を  
置て左京大夫政則は播州備前兩國の仕置大畧申附て早速福岡を打立五月廿五日  
上洛ありて細川勝元に加勢し公方の花御所を警固して在陳ある

備前勢京都軍の事

應仁元年六月京都東軍の族細川備中守勝久一條大宮の館を山名相摸守政之是を  
攻赤松左京大夫上洛の初なれば其後詰として山名と戦ふ赤松勢荒手の勢にて力  
戦し依藤豊後守は敵に矢を射立られながらそれをも不抜山名常陸介を討取明石

越前守は片山備前を討取其外浦上小寺等も高名して山名の兵廿四人赤松が手へ  
討取て忽相摸守敗北す同月山名の人數上洛すと風聞ありければ政則下知して備  
前國の海陸にて防留べしと言やりて其儲をなすうちに山名勢播磨路を通りて上  
洛する由聞えければ備前勢跡を追て馳せ上り京都よりも浦上宇野明石依藤秋庭  
等を差下し攝州にて山名勢を切崩して備前の勢は國に歸けるか東方細川軍猶難  
義のよし備前に聞えければ今度は守護代浦上則宗其勢七百余人を卒して八月朔  
日三石城を打立て同七日京都に到着して大宮の細川が陳に入らんと五條通まで  
進みけれども西軍さへへて通路なりかたかく卅三間堂の脇より谷越に山科を通り  
岩倉に陳取けるに翌八日爰にも山名が軍を進めてさへへけるを浦上粉骨を盡し  
て相戦ひ南禪寺に火をかけけるに折節風はげしくて民家も移る其煙のまぎれに  
浦上爰を切ぬけ神樂岡を過ぎ御靈口より細川の東軍に入て左京大夫の陳に加り  
て主君に謁しける其後又松田權頭元隆にも催促ありければ松田次郎左衛門に備  
前勢をつけて同十月さし登せ三條殿を警固す此次郎左衛門は以前より公方へも  
御目見申ける故此度も御前にめして合戦の次第ども仰有けるに次郎左衛門命を  
捨て一方をは相防べきよしいさぎよく御うけを申ければ則御盃を賜りて罷立け



るが則其日相國寺の戦山名が軍鋒先甚鋭して當りかたく細川六郎も討死すれば松田が勢も是より加り爰をかぎりて戦ひ今朝公方の御前まで言しにたがはず二郎左衛門力戦して終に討死したりけるを皆人は是を感じける是より後日々夜々京中の合戦絶る事なかりしかども記さるものなくまして備前侍どもの戦功聞傳へしことなしされども左京大夫政則文明のはしめより侍所にて京都の諸司をつかさどり浦上遠江守則宗諸司代たりければ後花園上皇崩御文明三年悲田寺に御葬送の時も浦上則宗三千の兵を卒して警固をなし、事などありて赤松家威勢ありて事を務め稗群なる事あるべけれども兵乱の時なれば更に記せる所にてなしかくて文明五年三月九日西軍の大將山名右衛門佐入道宗全病死し同五月十一日東軍の官領細川右京大夫勝元病死ありければ其後ははかしく戦もなく同年十二月十九日公方義政公隠居せしめし若君義尙公御元服有り將軍宣下ありて都も無異に復しける

赤松政則播州歸國并備前一宮社參の事

去る應仁元年政則備前へ打入國を取治られし時直に作州へも打入へしと議したれども京都の軍急にて上洛ありしが同年六月宇野入道太田三郎等作部へ亂入し

て山名の兵と戦けれども利なくして引返す積きて作州の山名勢過半京都の留守なる所を見濟し中村五郎左衛門國侍をかたらひ討入て所々城々を攻どりける京都にて政則是を聞一族なりける平岡民部太輔をさし下し中村に合力して討ける程に文明三年の頃までに作州を取敷ければ播州備前三ヶ國大概元のことく赤松の領國となりけりかくて京都の軍もはてければ文明九年政則も播州小瀬へ歸城ありて三ヶ國の政道をなし文明十二年には小瀬より備前に至り當國の一宮吉備津宮へ參詣ある其行列の隨兵の衣服馬具までも甚美麗をつくせり奉幣事終て歸路には福岡に止宿あり翌日は三石城にて浦上慶勝を儲く夫より小瀬へ歸城なり政則は侍所をうけたまはり京都の諸司なれ共近年在國あれば家臣浦上美作守則宗それにかはり諸司代を勉て在京せしはとに備前國中の政事は一向に松田權守元隆一人して執行西備前御野郡津高郡赤坂郡上道郡等は己か所領のこどくして年貢等を我城下富山又金川に納め諸社諸寺領ども心の儘に申附たり夫故其頃松田か判形の寄附状ども今も寺社に残るもの有り此權守元隆は去る文明五年富山の城にて病死す是を津島村の福際寺に葬る松田代々日蓮宗を崇信しける故に此寺を日蓮宗に改め元隆が法名妙善といふ故に是を寺号として妙善寺と改むとい



へり

一説には妙善は元隆か母の法名ともいふ按に律師則祐の遺号を妙善といふ然れば元隆并母の法名よは稱すべからず若是より以前に則祐の爲ふ寺号を妙善寺と改けるにやいかゞ覺束なし

元隆が嫡子松田左近將監元成家を續て父が時のことく専ら備前の國政をとり西備前を領とし我威をふるひける其上自立の心ざしもありける故にや今迄の居城富山は西國往還の所ふ近き地にて要害よろしからずとて津高郡金川の城よりうつる爰より又寺を建妙國寺と号し元成か弟松田元滿を出家させ住職として是を花光院と稱しいよく日蓮宗を尊信しける

松田左近將監赤松に叛く事

文明十五年松田元成が備前の國政余り過分に振廻又國中過半押領せし事を大守政則惡みて在所を改易すべきと小菴の長臣ともに内談ありしに是を元成傳へ聞て元成我備前を過半押領するといふにはあらず兵糧軍役の用に費すのみ是を返すべしとあらは勿論の事也又伊福卿に於ては軍功の賞に鎌倉の時に給はりたれば異議あるまじ如此の沙汰ある事とて事を左右よよせて吾を亡さるべきの企と

覺ゆれば此上は力及はず存亡を一戦に極むへしとて金川城ふ猶要害を構ふもとより此山は谷ふかく山岳待ち東麓に大川を帶て松栢茂りて堅固の城地なるに山上に櫓を上壁を付陳屋を作ならべ備前半國の人數を集めて是に楯籠る松田一族には元成か嫡子孫治郎元勝元成弟惣右衛門元親親秀其弟花光院元滿等十余輩家臣には伊賀修理亮藤田佐藤大村横井宇垣等其勢三百余騎と着到に記しける此よし同七月播州小菴に聞えければ當時の三石城主浦上紀三郎則國に是を討べきよし政則命じければ則國小菴ふ勢揃へし三石城に歸り猶勢を集めて福岡ふ着陳す松田元成金川にて是を聞合力の勢を求めたために蕪州嚴嶋參詣と稱して備後國へ立越え山名又次郎俊豊は赤松が敵なれば是に謁して本備前は山名の御分國なり此度赤松某を打んとす此節御合力御加勢あらば備前へ國を切取御旗下ふ參るべしと申ければ俊豊兼て望所なれば早速許容し近日に備前へ發向すべきよし返答あれは松田大きに悅其約束をなして金川に歸り猶近國の勢を集め兵糧をたくはへ防禦の用意頻なり又福岡よりも松田が領分へ忍問者を入置けるが山名大勢よて備後より出て松田ふ加勢するよし聞えければ浦上利國諸將と評議しけるは今金川へ押寄て攻ども若長疎及ば、備後の加勢來りて後詰せは也、敷大事



及へし所詮當地福岡に要害を構へ備前備中の勢を居なから引請て一戦なし是  
 を切崩して後直に金川に到り松田を亡さんにはしかじと有ければ何れも先事の易  
 きにしたかひ此議に同じて福岡の川中の島山を本城に構て要害をなしける元來  
 此城地は小嶋大和守在住の時城壘を堅固にまうけて無双の要害なり先東西に大  
 河流て其中の嶋山を本城として櫓をわけ屏をかけたり此度は大軍の籠城の事な  
 れは近邊の民屋一千余宇を構の中に取り入その外に堀を二重三重まはり川水を  
 せき入たれば究竟の要害たり楯籠る人々まは浦上紀三郎則國同伯耆守基景同豊  
 前守兄第三基景が子同六郎次郎同與三左衛門楠橋豊後守同彌五郎藥師寺四郎  
 左衛門同山城守同二郎左衛門延命寺六郎左衛門同小六難波掃部介同十郎兵衛同  
 四郎左衛門同八郎二郎山田平左衛門同四郎左衛門有松右京進同與七同彦八装掛  
 伊賀守是本筑後守同孫二郎津島修理亮同三郎左衛門小串藤左衛門中村二郎右衛  
 門大嶋縫殿助沼田與一郎延原八郎左衛門兒島太郎左衛門山守八郎左衛門内藤與  
 左衛門市村隼人佐足立新三郎藤田新兵衛志方孫六同藤兵衛横山助五郎青津九郎  
 左衛門矢山二郎左衛門伏見藤左衛門本郷孫九郎片岡孫左衛門額田十郎左衛門彌  
 延九郎左衛門其子新九郎大工村八郎三郎同富太郎最所彈正左衛門目黒新右衛門

奈島兵庫介中村三郎兵衛其外備前播磨兩國の軍勢都合二千余騎と聞えし川上  
 板屋瀬吉井村大内村の間の瀬を板屋の瀬といふの東には長船右京亮同左京進香  
 ヲ登新田の野伏を差副て守らしむ川下津坂口の瀬一本に古津瀬をは坂口五ヶ庄六ヶ郷  
 の野伏是を堅めて敵のよするを待居たり松田方には是を閉てさらば福岡に押寄  
 攻べしとて同九月下旬金川の城を出陣す松田左近將監元成を大將として嫡子孫  
 次郎元勝元成か弟惣右衛門元親其弟花光院元滿家臣ふは宮内備中守藤田備前同  
 掃部介其子同次郎同姓大炊介同駿河守其子同民部大輔同修理亮同孫四郎同三河  
 守同越中守同又三郎伊賀修理亮津高郡鍋谷城主佐藤式部大村彌五郎等一千八百余騎は  
 福岡よりは西北ま當りて吉井村の山に陣を取る備中勢まは上野土佐守同豊前守  
 同三河守同肥前守按に上野は上月なるへしされども本書の儘に書す庄伊守其子  
 四郎次郎右衛門四郎多氣川西川西小坂高木東條等其勢都合一千三百余騎是は吉  
 井村の北の山下に陣を取備後の山名に兼て約束をなし置ければ九月廿六日山名  
 亦次郎俊豊備後國分寺を出陣す相従ふ人々には大田垣美作入道舍弟同遠江守本  
 郷藤左衛門山内新左衛門同下野守多賀新兵衛滑良兵庫助同四郎太郎三河内河内  
 守金谷山城守花栗播磨守湯川備中守銀治屋五郎左衛門和氣筑前守安田掃部介小



越彈正左衛門尉由谷加賀守江田藏人佐同與三左衛門浦喜上野介敷名備中守下見三郎栗原刑部左衛門尉吉原藤左衛門尉田尻左馬允上山出雲守板倉新左衛門等也其外安藝國の小早川等に草井和泉守竹原備中守毛利太郎赤川和泉守出雲國には高木惣兵衛伯耆國に小嶋二郎四郎同掃部亮石見國に周布屋等加勢して其勢都合三千余騎十一月七日に備前國に着陣し是も吉井の西檜原に陣取檜原の東南の小山を本陣とす是を火鉢城といふ是等の大勢福岡の川より西に陣しけるを見て浦上方にも兼て敵を福岡へ引請て打取べしと議したる謀に相違し松田が大軍に恐れて軍を出さず要害にたてこもる又松田方も大軍なれども福岡の城大川を隔て堅固なれば卒爾に攻へき便なくてたかひに陣取たる計あて合戦もなく十月も十一月も對陳してむなしくすぎにけり

## 福岡合戦の事

福岡の要害堅固なれば松田勢大軍なれども攻がたければ先上の板屋が瀬下の古津瀬を渡して一戦をなすべしと評定して十一月廿二日上の松田勢の先手と下の檜原の山名勢が先手と上下の瀬を渡し板屋が瀬の敵を打拂ひ長船右京亮が家其外民屋に火をかけて一字も残らず放火して軽く引取ける下の古津の瀬の渡にて

も野伏とも數十人討捕て引取けるかくて浦上紀三郎が士に檜村與三兵衛同又四郎といふ兄弟の者あり當時松田元成がもとに來り奉公して今度も軍の供して吉井の陣中に有けるが松田元成ひそかに檜村兄弟を近づけ汝等浦上の方へ歸り行て奉公して透間を見て紀三郎を討城に火をかくべし左あらは過分の恩賞望にまかすへしと言聞せければ檜村兄弟是を領承して二人の者ども吾下の郎等を引連吉井を出て浦上が陣へ行て再び奉公の事を願ひて許容あれば福岡に在陣して隙をうかゞへども紀三郎を討べき便宜もなく有けるに十一月廿二日上下の瀬を渡して合戦ありけるをよき時節と考先城中に火をかけ其さはきによりて紀三郎を討へしと兄弟相計り廿三日の夜に入風も強く吹ければ是を幸と城中に火をつけければ忽に焰上り火の粉諸方へどび散り陣やゝに火うつり焼おけり松田方又は是を相圖の火なりと心得松田も山陣を下り其外も川を越て福岡の城へひしと攻かゝる城中には銘々の持口を破られしと衆を勵して爰を専とふせぎ戦櫓よりは指詰引詰射る矢夜中なれども火の光白盡のことくなればわだ矢は更もなく攻入者ども手負討死多くて攻入かねて猶豫しける所を城中を見すまして浦上三左衛門其子與三今こそ時分はよきと士卒を下知して城戸をひらき突て出山



名勢を四方八方へ追拂ひければ一支もせず我先にと引取川を越てみなく本陣にと歸りける其紛に檜原兄弟は則國をいかにもして討べしと覗けれども叶はず兎角する中に夜も明ければかねての謀も空しくなりし上に其夜の火事を諸將相互に糺明をどけけるよ此檜村與三兵衛兄弟を人もあやしみければ其下人を潛にとらへて尋ねければ其主人の與三兵衛が所爲なりと始よりの密謀を一々告げれば其事顯れ早速檜村兄弟を捕へて糺問に及べばあらはれ白狀しける故兄弟とも不福岡の城下に磔にかけられけるかゝる事のみよてはかゝ敷一戦もなく日を送りける十二月十三日庄伊豆守元資か手の者どもを野伏の跡にして三百人計富岡といふ小山の北の陰を打出たり浦上紀三郎が手の者城中を是を見て此度一度もはかゝ敷軍せねば願ふ所なりとて川を越て無二無三に切て懸る待儲し事なれば両方人亂れて相戦ふ寄手に細屋七郎左衛門白賀新兵衛討たるれば城方にも岸野五郎左衛門討死して暫く虎口をくつろげ守り居たる處に庄伊豆守が伴右衛門四郎手勢五百計にて富岡山の南より討て出けるに城方檜橋彌五郎岩間孫四郎難波十郎兵衛沼田與市延原八郎左衛門を始として大勢右衛門四郎を引包討捕んと進み戦ふ伊豆守是を見て右衛門四郎若武者よて危忽の軍して討死もすべし

是を諫て伴ひ歸れとて法城寺掃部助といふものを使として言やりければ右衛門四郎是を聞仰おてはあれど戰場にて侍の討死は尋常の事いかでおめくど引退くやうやあると楯の表へす、み出備中國の住人庄右衛門四郎なりと名乗て二間柄の鎗を以て面もふらす突て懸る沼田與市兵衛岩間孫四郎目黒次郎左衛門弟與一左衛門以下庄を中に取込て火花をちらし攻戦目黒二郎左衛門は脇當を突拔れ弟與一左衛門は弓手の肩を突れながら少しもひるまず庄右衛門四郎を討取けり法性寺掃部助は右衛門四郎が劔を制すといへども用すして打死しければ立も歸られず庄と同じく進み戦て延原右京進と渡り合あくまで戦一足も引ず討死す福屋藤四郎は延原彦八と渡り合鎗を捨て引組けるに延原福屋を組臥せ刀を内兜胸板を二刀さす福屋さ、れながら下方我は石見國の住人福屋藤四郎といふ者なり一足も引ず爰に討死したりと言傳へて給はれど是を最期の言葉にて首を捕られにけり是にて両方人馬の足を休めて物わかれになるべき所に福岡城内若武者廿騎計此勝負も逢さるは無念なりとて掛出ける備中勢も庄伊豆守を始として是を真中に取込討て捕んとせし所に浦上伯耆守城を出て大音上て無益の戦はや引上よと下知して初の勢も後の勢も一ツも引まどひて引入けるに庄が兵士敵



の引を追て城へ付入にして攻め落せと進んで追行ければ城兵返し合せく相戦て引取ける備中勢殿敷追討ければ彌延九郎左衛門井原孫右衛門内藤四郎兵衛福井小次郎其外紀三郎か若黨伯耆守が若黨ども已上七十余人討死す浦上彌三郎も數ヶ所疵を蒙て漸引取ける其外疵を蒙むるものかふるよ追わらず中おも福井小次郎といふもの其父は福井源左衛門といひて京家の侍なりしがいかなる子細ありてや此國に下り住ける其時此小次郎四歳なりしを引具し其母をば京に残し置けるとし經て小次郎今年廿一歳になりけるをともなひてこゝに籠城しけるが今日のせり合に父子とも出て戦て引取時に及て親と子押隔られ小二郎城又歸りて見るお親の源左衛門見えされは扱は討死せしと思ひ又取てかへし追來る敵の大勢に向ひ福井小二郎と名乗て向ふ敵堅さま横さま戦て父を尋ねけれども行逢ねは討死せんと死狂に戦けるを家の子やうく肩に引かけて城中あ入けるに淺手深手二十六ヶ處負て終に空くなりける父源左衛門は又小次郎が行衛を尋かねて引取けるにかく討死せしを聞大になけき陣所に入て箱のうちに書殘しけるもの、あるを見れば都の親類どもへ此度の戦の事ども書のへ殊に母のもとへ書置し文をみれば幼少より副奉ることもなく心計は通へども年を経てまみえ候事

もなく夢の浮橋絶て後御歎き有らんとこそ心に掛り侍れよしそれもあだし世のはどなき思召慰め給へと細くと書て文の奥に

生れこしれやこの契りいかなれば同じ世にたふ隔はつらん

書留けるみな人は是を聞てけふの討死は思ひまうけし心にやといど、哀を催しけるかくて山名亦次郎俊豊當國着陣の時より但馬國へ飛脚を立親父右衛門佐方へと申遣けるは此時但州より播州へ御發向あるべしさあらは御勝利有へし又其事御延引あらは敵播州作州牒し合せて働申べし左あらは味方大に難儀たるべしと再三言送りけれども上意を得ずしてはいかゞと右衛門佐但馬の丸山の城に有て働出ることなし又福岡の城浦上紀三郎よりは赤松政則へ注進して備中備後の大勢にて三方を取閉み候其上阿波の大西備後の雨宮方も近日敵に加勢として罷向ふと風聞候事實ならば以の外大事よて候間美作勢をさし越させ赤坂郡鳥取邊へ打て出候は、敵攻るに堪べからしと度々言遣しけれども政則へは披露にも及はず其意を得たると計にて日を送りけるが此頃宇野下野守浦上掃部助を福岡へさし向られけるよし聞えし計にて是も途中に陣して福岡へは來らず夫のみならず政則は本の知行但馬國朝來郡を打取べしとの企ありて自ら軍を卒て十二月十六



日小旗を立て同十八日大賀庄お着陣ある此よしを福岡へ聞て力を失ひ此城を持  
あぐみて予籠りけるが政則の但馬表の軍も利あらずして小旗へ引返されければ  
宇野浦上も片上より引返し播州へ歸りけると福岡へ聞えて城中愈言語を絶し色  
を失て予居たりける

文明十六年正月二日福岡合戦の事

かくて文明十五年月迫に及て福岡後詰として美作國小瀬彈正忠大河原彈正左衛  
門を大將として一千余騎備前美作の境大松山に陣を取ると聞えて福岡も少し  
色を直しける松田方には是を聞て松田孫次郎を大將として金川城に楯籠り作州  
の勢をさへんとす又福岡方よりは明石六郎兵衛新田庄の野伏を卒て日笠村に  
陣をどり作州勢に力を合す又松田方の松田孫四郎佐藤式部丞楢原堤小野田等吉  
岡の南の山お陣取り長船右京亮が館の跡の古城を取て播州の通路をさし塞福岡  
より浦上豊前守を大將として熊山へ人数をわけ大群を焼て陣取るかくのどく両  
陣より手配りして有けるが十二月廿九日松田が陣より吉井の山を下り川を渡し  
東をさして人数を出す何の爲とはまらねども福岡勢打て出て遠矢射かけ一戦を  
なさんとしけるか松田勢いかと思ひけん一戦も不及引取ければ福岡勢もした

はずして引取ける明れば文明十六年正月二日軍の首途の祝せんとて吉井川の東  
よりも西よりも人数を出して矢軍をし夕日になるまで追合て引退く同六日城よ  
り見れば山名勢の陣騒ぐと見えしがやがて人数を出し城近く寄せ来る福岡に是  
を待うけ野伏を出し矢軍して引退けれ共寄手は猶引取らす外堀の河原へ押寄三  
百計の勢にてひかへたり城中より薬師寺四郎左衛門貴能これを見て今度は我一  
備にて一軍せんと城戸をひらきて叫てか、れば山名勢追捲られて引退時に和智  
左衛門下知してきたなし者共何くへ引かこ、にて死よとよば、りて真先に取り  
て返し戦ければ是にいさめられて我劣らしと引返し切掛れば城兵迫立らる薬師  
寺四郎左衛門白柄長刀取直し貴能是にあるを返せと下知して切掛りければ  
又山名勢引色になる處に大田垣美作入道と氣筑前守山内新左衛門三吉和泉守馬  
も乗られ士卒を下知して備後國を出し方骸を戦場にさらし再び本國へは歸るへ  
しとは思はざりし引な者共とて槍長刀を引さけ進む内にも筑前守和泉守先を争  
ひて切りか、りければ薬師寺等不覺あどに引退く所に薬師寺も敵と同しく士卒  
をいさめ貴能爰めて討死するを返せと大音上て攻戦ふ薬師寺彌四郎等貴能  
を討せしとて取て返しとて攻戦ひ津坂の山の麓方城の堀際まで敵味方二三千



の人数にて追つ返しつ戦ひしは誠に目醒しく見えしか、る處に山名勢の中より福屋九郎右衛門と名乗て黒革威の服巻お鍬形打たる甲の緒をまめ五尺計なる太刀の鏝本まで血成たるを以て薬師寺貴能に切てか、る貴能長刀を以渡り合追つ返しつ戦けるか貴能が家來助け來りて終に福屋を討れよけり此勢ひに山名勢を追まくりけれ共薬師寺貴能も戦つかれて既にあやふく見えければ同二郎左衛門則能貴能討すなものとて討てか、れば額田十郎左衛門片岡孫左衛門も則能と同じく進みてきひしく戦て一足も退す三人ながら枕をならへて討死す是に山名勢も切立らる、所お江田滑良板倉等堀の水上市を渡して中を遮て切り懸りけるに又城兵まくり立られ崩れか、る所お櫛橋豊後守子息彌五郎を伴ひ其身は黒革の腹巻に同毛の五枚兜よ白熊黒熊を合せたる引まはしつけ二間柄の鎗を持って真先に進み大音聲をあげてきたなし者共山名は元來所領の敵也本望の合戦なるを皆討死せよと喚はれば士卒もふみ留り相戦ふ彌五郎は弓手の脇に扣たり山名士三吉左京允滑良四郎太郎福田九郎左衛門衆に進て戦ひ滑良と豊後守と渡り合ふ滑良は大力の若武者にて大太刀持て横さまに討けるを鎗にてうけ余る太刀櫛橋左の腕を堅さまに切さかれ既に危く見えし所に彌五郎走出て切合郎等も落

合ければ終る滑良を討取ける彌五郎は猶も戦ひ三吉左京允に渡り合ふ三吉鎗を目釘本より切折られ兜の鉢をも二ヶ所切破られ難波四郎左衛門が中差にて射ける矢内甲にあたりてこらへず小膝を打て終に彌五郎に頭をどられける福田九郎左衛門は志方孫六と戦ひ孫六が頭を取る其外我もくんと戦て何れ勝負も見さりけるか山名勢次第にかさみ松田勢も討てか、れば城兵大勢にとりこめられて討らるべく見えければ浦上三左衛門息同與三父子三百計の勢を以助け來る大將紀三郎則國も是を見て大將の討死愛なりと鎗提て飛で出るを同伯耆守強て押留め此合戦今日に限るべからし鹿忽の討死無益也と堅く制して出さずして則國の侍内山彌五郎下山彈正とて手利の精兵のありけるとさしつめ引つめ寄手を射させける松田が勢の中にも松田惣右衛門元親と矢印書たる矢にて味方多く射られければ此元親親秀を目がけて射出しけるに惣右衛門が射る矢下山彈正が胸板に中り矢先三寸計押付へ射出ければ其儘たふれ死にけり内山其所を見すまし上差をつぐひて惣右衛門を射るあやまたす射向の袖のはすれば篋深に射込めは是も空くなりみけるかく戦ひくらし山名勢も松田勢も引取ければ福岡勢も兵を入れて城を守りける今日薬師寺二郎左衛門則能額田十郎左衛門片岡孫左衛門枕をならへ討



死せしは覺悟せしことよてそ有しこの頃此三人陣屋に寄合て藥師寺か言けるは情此合戦の始終を案するお一定味方討負ぬと覺ゆるそ其故は松田は元來當國の者也其上備中勢備後の山名勢合力して大勢也味方は去年八月より籠城してあれども播州より加勢の一騎も下らす剩へ政則公眞弓時合戦討負儘の勢にて小菟籠城と開ゆればとてもはかしく敷事もなく討死すべき身なりそれに生残り赤松家の果を見んも物憂ければ一番に討死して名を後代に残し先祖の忠節をも顯しなんこそせめての事なれば此戦に討死をは極めしと語りければ頼田も片岡も是に同じて誰もさこそ思へさらば同時に死をとものに極めんと堅く契り置げるとすかくて此正月六日戦の有けるお今日を其期と三人いひ語らひけるが藥師寺則能陣所を出るとて只今敵の手に渡す願なれば最期の對面なりとて鏡に向ひ打笑ひて打立ける頼田はとし頃岡本筑後守よすぐれてねんころなりければ吾討死せは一子又三郎を頼む也一所にあらはとも討死すへしと別の備に置ぬるよしを言置けるとそ片岡は家來に向て今日の戦には一定討死すべく覺ゆるなり打込の戦なれば戦死の時何をまゐるしに吾討死の死骸とも見分がたかるへし是をまゐるしに尋ねよとて紙よりよて左の二の腕を二重に結て打立けるか其詞ふちがはす枕

をならへ討死せしかはあはれ勇士なりけりと皆れしみあへりける

## 福岡落城の事

浦上美作守則宗は年來京都諸司代にて在京してありけるが是を呼下さんどて福岡より飛脚を以注進しければ正月中旬則京都を立て東播広まで下着しけるがいかなる子細ありてか主従の間隙出來て赤松市に盾して軍勢を催促す故に三石へは歸らすして東條に在陣す其威勢つよければ國中則宗の陣へ馳附赤松の一族たる高松の城主宇野下野守迄も是に馳加はる小菟の赤松政則へ隨從するものどては宇野形部少輔小倉肥前守其子少四郎藥師寺四郎等僅残りて皆落失ける其上在田福岡も下野守に同心して相背くよし浮説すれば政則とても此城に有て運もひらかれまじ一先此城を引退上京して上意を伺ひ多勢を催し合戦すべしとて同正月廿一日小菟の城を出て攝州へ落られける此事福岡へ聞えければ城中赤松方浦上方とて二ツよなり誰敵になるべしともしれずさわかせる先櫛橋藥師寺等は去年冬より當城に籠り一命を投て軍するもみな政則を世おあらせ奉らん爲にてこそわれ今は専なき籠城なれば此城出て政則の往末を尋ね奉る外はなしと落支度するも尤なり紀三郎則國は此由どもを聞櫛橋藥師寺兩人此城を落なば誰を頼み



て合戦をなすべし又さあればとて此城を去て何くにありて本意を達せん所詮其  
 兩人と指違へ死を極むるより外なしと手の者ども少々引具し夜廻りの跡にて出  
 立たるを伯耆守基景是を見て申けるは目の前におる大敵を聞きて同志討して大  
 將の死をなす事末代までの耻辱此上もなき不覺なりと堅く制してとどめければ  
 力及ばす留りながら則國猶死を極めて千人萬人も落は落よかし此負軍は我一人  
 が耻やどもとより覺悟の事なればさらば吾一人爰に切腹せんと刀をぬく所を基  
 景すかり留めこは狂氣とや申べらよく心得給へ此合戦にて事散すべくは覺  
 悟あるも尤といふべし既に則國播州にいまして大勢是に属する事なれば爰を一  
 先引取身を全くして則宗も属し一方の大將をうけて其時に死を軽くして軍をな  
 さばなぞ今の耻辱を雪ぎたまはさらん其遠慮もなくかりそめの耻を恐びかねて  
 死をなしたまはば本意をとげざる上に後代お嘲弄を残し給はんよく考へたまへ  
 と言を盡して諫めければ則國其理に復し力及ばず正月廿四日の夜半ばかりに伯  
 耆守を供ない城を出で下野守が居たりし高田の城へ落行ける櫛橋薬師寺は舟  
 も乗りて政則の行術を尋ねて四國の方へ落行ける正月廿五日には昨夜浦上勢  
 福岡の城退散せしを聞て松田が兵共城お押寄てみれば敵の一人もなければ勝也

きをわけて即時に城を焼拂ひ其邊を放火亂妨し浦上勢の集りし所々をは道落し  
 て備中勢備後の山名勢其外近國の勢どもは皆己か國々へよろこびを唱て歸りけ  
 る松田勢は勝はこりて此勢ひに三石の城を攻取らんと猶陣を張て居たりけり

松田元成討死の事

松田左近將監元成は金川へも歸らず備前へ國を取敷んと兵を進り先三石城を攻  
 んどす三石よりは片上伊部の邊の城々も兵をこめて是を防ぎ戦ふ或日吉井川の  
 東天王原にて戦ひしが松田打負て敗軍し諸勢にけちりて松田元成唯一騎になり  
 て金川へ引取らんとしけるを浦上勢まきりよ追かくれば引かへしてまはし戦て  
 又引取れども深手淺手多く負たればせん方なく磐梨郡矢上村の山の池といふ  
 所にて自害して失にけり松田が侍に大村出雲といふもの雲州尼子家へ使に行て  
 今日歸りけるお元成か自害して臥たる所へ逢て是を悔れども其甲斐なくて出雲  
 も同じく服切て死にけり此事金川へ聞へければ元成か子松田元勝こゝに來り其  
 死骸を葬り一寺を此所に建立し立雲山大乗寺といふ大村出雲をも元成が墓の傍  
 に葬りけり

大乗寺は寛文中廢して元成か墓と出雲々墓とは池も残り



政則再播州下向事

政則播州を退き京都へ登り將軍家へ浦上が不臣なる事を訴へ軍勢乞あつめ二月半に播州へ下り別所大藏少輔則治を先手として播州を取治め白旗の城を山名勢是をとりて楯籠りしを追落しければ浦上美作守高田の宇野下野守等も降参しければ政則再ひ小塩城へかへり住して播州備前等を治め浦上則宗同紀三郎則國宇野下野守三人の老臣ことを取りてまばらく静謐したりける

政則卒去の事

明應三年四月廿五日赤松左京太夫政則播州小塩の城に病死す時に四十三歳なり法名松泉院無等性雲といふ一説に明應二年と言ふ又五年といふ共非なるへし載たる所しかるに女子ありて男子なき故七條藏人元久の子才松丸とて當年七才なるを養子とす一説に三是は元祖圓心の子範資々々の子教政々々の子元久々々の子此才松丸也其後明應九年十二月小塩城にて元服七左京太夫政村と名乗一説時は義村といふ後に政村と改むといふ又永正元年六月に政則の嫡女十三歳なり作州久米郡草木の城にて元服といふしを妻とし婚禮ありけり浦上則宗は小塩に居住し政村家督の時より幼年なるをたすけて播前備前美作三國の仕置を専らふ執行た一人して權威を振ひ三石に

得平記曰  
政則は坂田の  
くも寺ニテ病  
死と云  
得平記曰才松  
殿元服ニテ次  
郎義村ト申後  
に兵部丞殿と  
申くわういん  
殿と申は此御  
事也まやうい  
ん就

は嫡子近江守宗助を置く城を守らせける

一説お政則何れのとしおや從三位ふ叙せられしといふ其時政則の歌に  
弓杖つさのはるや三の位山四世にも越し道をかしこら  
とよみけるといふ應仁の乱世の事故軍功の賞に別勅の事などありて三位  
ありし就公卿補任等には見へす

浦上宗助と松田と合戦の事

松田元成は文明の末ふ討死し其子孫二郎元勝家督を繼て是も左近將監と稱し其儘金川に在城し西備前を領して浦上家と絶す迫合ありけるが明應六年三月十六日浦上近江守宗助其勢千余騎を卒して三石を出陣し上道郡へ亂入し村々を放火し御野川を渡し金山の麓牧石と陣を居ゑそれより兵をすゝめ大安寺村富山の城を攻む此城には松田惣右衛門伊木横井等籠城して是を守る浦上勢伊福村を放火して城をまきりに攻けるに松田元勝金川にて是を聞五百計の兵を卒て笹ヶ瀬表へ出張して富山の後攻をして浦上勢へ突てかゝる城中よりも打て出て前後より戦へは浦上終に打負て敗北し釣の渡りを越て龍口山に上り此堅固によりて陣を取り敗軍の勢を集めて松田勢をふせぎ居たり松田元勝は牧石に陣を取りて龍口



を攻伊賀左衛門勝隆は赤坂郡より出て牟佐の高倉山に陣を取る松田惣左衛門は富山を出て敵を追ひ和意田湯迫の上の山に陣を取て浦上が三石への通路を塞ぐはじめは龍口の山を攻て戦ひけれども其後は敢て攻戦はず遠巻にして浦上勢を疲らしける浦上宗助糧道を絶れて甚難儀に及ぶ事三石に聞えて宇喜多和泉守能家兵を助て松田惣右衛門が兵を追崩さんと計りけれども松田用心さびしく討べき隙なく日を送りけるが松田が備少し油断有けるを伺ひ能家か家士六十余人を土民の跡に出立せ農具等を擔せ暮に及て脇田矢津の邊に伏置き三更に及ぶころ所々の在家に火を付て焼立けるを松田執は思ひかけず民家の失火なりと思ひ人を出し火を消んとせし所へ宇喜多か兵手を分て所々あて関を作り切てか、りければ松田勢大に狼狽して亂れはしる龍口山の浦上宗助兼て相圃の事なれば火のもえ上るやいなや惣軍を一手になして山傳ひに脇田村へ出て宇喜多と共に松田を追へは一さへもせず西の方川を越て引退くかくて宗助は宇喜多に對面して引連て引取ける松田勢少々は三石勢の跡をまたひけれども宇喜多殿して東川を越て宗助を守護して歸陣しけり

## 赤松臣兩浦上權を争ひ合戦の事

明應八年浦上美作守則宗と浦上因幡守村國と權を争ひて合戦に及ぶ此時赤松才松丸いまだ幼年なれば老臣みな己が威を強うし國政を恣にする所より事起りて村國は播州己が領地の兵を集めて則宗を討んと謀る則宗も三石の兵七百余人を卒して村國を攻むされども勝敗も分れず合戦牛角なりしが或時則宗打負け日山の陣を退て白旗の城に入て難をのがる村國が兵まきりに攻て危ふかりければ從兵ども志を變し親族までも皆落支度をなしける時に宇喜多和泉守聲を怒し衆を勵まして曰人生僅の間に義を背き命をねしみ愛をのかれて何の益かある萬人は落行ども能家に於ては身命を捨て此城を骸をさらすべし臆病者は落は落よど大に呼びければ諸卒みな此一言に愧て金鉄の思ひをなし則宗に力を台て戦ひければ村國が兵も引退くこゝに於て則宗小蓋に至り主君才松丸を誘ひ播州鹽屋の城に籠るまかわれは赤松の臣みなく是に従ひ行く楯籠れば村國も攻破る事を得ず數日を経けるうち京都細川右京太夫政元より兩陣へ使を立て今主君才松丸幼年の處老臣互に權を争ひ合戦及ぶ事公儀を不憚の至也向後合戦を相止め忠心を存し幼主を守立て互に和平すへし若是に違犯あらは御征伐可有公方の仰をうけて下知ありければ兩浦上和平して各々兵を入れて小蓋も無異ふなりにけり



宇喜多能家矢津牧右勇戦の事

松田元勝近頃は雲州尼子を頼み又備後の山名に組して浦上と戦ふこと度々也文  
 龜二年の冬三石より兵を出す先福岡より勢揃し宇喜多和泉守將となり三百余騎を  
 引卒し東川を越えて兵を進む松田元勝是を聞て家臣横井大村伊賀佐藤等を將と  
 して兵をさしむけ完甘村の上に陣を取り矢津の時を塞て防禦の謀をなす宇喜多  
 勢本道より押寄せ足輕を進め攻む能家兵を下知しみづから其先に進て戦ひ松  
 田の臣有松右京進を組付にして首をとる有松が從兵二人切てかゝりたるを是を  
 も突伏せ首をとる大將の働きかくのごとくなれば諸士の働高名する者多し終に  
 松田勢打負引退く能家打取たる三つの首をとり付て勝鬨をあげて福岡まで歸陣  
 わり明る文龜三年正月にも又宇喜多能家浦上勢を助て上道郡へ打出陣を張る松  
 田元勝御野郡笠井山ふ陣す牧石の川原へ兵を進めて日々せり合あり或日浦上勢  
 より足輕をかけ先手を進め川を渡して牧石河原に戦ひるが松田勢數多山上より  
 下り重りて浦上勢を取巻一人も不殘討取んとす宇喜多能家はを見て士卒に下知  
 し惣勢河を渡し味方討すなどて松田勢に討てかゝる元勝も笠井山より下りて戦  
 ふ能家士卒を下知して登さま横さま切て廻れば矢を三筋甲に射たてられ内兜を

も鎧にてつかれけれ共是をことゝもせず戦て終に松田に打勝元勝は居福の駒へ  
 引取富山の城み入れは能家勝鬨をあげ川より東へ引取ける其後も宇喜多と松  
 田と迫合絶ることなし

浦上則宗病死同村宗赤松に叛く事

永正九年春浦上美作守則宗三石城にて病死嫡子近江守宗助は是より先に早世せ  
 しかは二男掃部助村宗家を繼ぎ三石城を守り又小蘆の家より父のごとく赤  
 松家の仕置をなしける同十五年の夏小蘆の家にありし時政府の寵臣小久米十郎  
 左衛門近氏といふもの政村の申付られしとを村宗へ傳る事ありて白子町の村  
 宗が家へ行て逢へると言しに三度まで出會ふることありて其不禮を怒りけれ共  
 色にも出さずいつかは此うらみを報べしと思ひて日を徑ける其頃京都より小蝶  
 といふ女を政村より下し十郎左衛門がもとに預け置れしを辛と思ひ或日掃部助  
 を十郎左衛門が家へ招き饗應しかの小蝶を酌ふ出しければ掃部助其興に入て此  
 小蝶を所望したり十郎左衛門即ち許容し易き事にて候夜ふ入てひそかに迎を越  
 されよと約束をなして其夜十郎左衛門は態を登城して留主なるに小蝶を迎ひ人  
 に渡し夜ふけて歸り此よしを聞驚し体にて登城し今夕留主のうちに誰人が小蝶



を盗取て歸候と大きき驚て政村へ申ければ政村も大きき驚きひそかに行衛を聞  
出せと十郎左衛門に申付らるさて二三日過て十郎左衛門ひそかに政村へ申ける  
は小蝶を盗しは掃部助か所爲にて候白子町の家にたしかお隠し置よし承り候と  
申ければ政村常々浦上か奢を悪まれける所へ此事出来たればいよく愠り強く  
よし。近年の内掃部助を成敗すへしと怒を押へて數日を経けるに誰言どもな  
けれど浦上滅亡近きにありとさ、やさける掃部助是を聞て此君を後子として當  
家を繼せ申せし事も父則宗かはからひ也其上某國家の仕置も正直にとり行て世  
も治りまづかなるに政道に邪惡あり奢をなすなど宜ふ事甚ゆるなし去かも誅罰  
有べきとは何の罰を稱せらるゝ事にや其義ならば是非に及はず三石に歸り兵を  
催し一戦に勝敗を試み運を天にまかすべしと一族家臣相集め其勢二千六百人白  
子町の宿所を打立三石をさして引取ければ小摺の騒動不斜町人百姓までも上を  
下へと返しけるかくて掃部介は七月十一日に三石の城に歸りて猶兵を集め船坂  
山をさし塞き籠城の用意まきりなり政村は掃部助が人數を集め小摺を出けるを  
打どめんと儀せられしかども不意の事にて集りたる勢もなければ老臣等是を強  
てとどめける故齒がみをなして止まれけれ共つゝさて三石の城を攻んとて軍勢

をわつめ軍議をなすこと専らなり

### 三石城攻の事

永正十五年九月廿四日上總介政村みつから兵を帥て小摺を打立先浦上が一族の  
楯籠たる松山向隅大磯等の城々を攻落し彌高山に掃部助が従弟甲斐太郎か籠り  
たるをも攻落しければ太郎は三石へ入にける三石の城には二千余人の兵卒集  
りて居たりしが小摺勢所々の城を攻落し勢ひ強きを聞てかたへおて評議せしは  
今度の軍大守へ敵せし事なれば終には此三石をも攻破らるべし其上我等も同し  
く大守に敵し汚名を慥の上お殘さんも心々し今大守お降參せんこと本意なりと  
一夜の程に七十余人落失ければ兵氣一ならず籠城もいかごと危かりし所に此度  
も宇喜多和泉守義をとなへて諸卒をいさめ勵しける言葉に感じて皆ふみど、ま  
りける和泉守仁厚なる生質故僅の一言にも人みな感伏しけるかくて十一月十二  
日上總介政村三石の城へ政寄先陣秋津宮内秀國同弟十淨坊等進みて先船坂をさ  
しふさぎたる勢を攻破り三石の町口よ押寄間を揚れば城中よりも人數を出し浦  
上七郎兵衛吉田左衛門眞先に槍を入れて火花をちらし攻戦ひ兩陣相引に退しか  
城中より河原又八郎佐田荒平治と名乗て唯二人打出る寄手よりも二人太刀打振



て渡りあふ又八其敵一人を打取て猶敵に向ひて戦ふ荒平治か相手は三上主馬といふ是も主馬を打取る主馬か兄三上右京弟の敵通さしと長刀を以て渡りあふ荒平治少もひるます戦ふ右京長刀を切折られ己に危く見せしか陶山彌四郎生年十六才右京を助て打て掛れば荒平治が甥佐田喜三郎又落合て右京と切むす敵も二人味方も二人命限りと戦ひけるか吉田奎左衛門味方討すな者どもとて討てかゝる寄手よりも刀稱檜崎神田等攻寄て戦けるも城中より矢を射出して寄手を射れば寄手少し色めき引色に見えたるに力を得て吉田浦上士卒に下知して切かゝる寄手二町程なひき立其時先陣たりし秋津宮内少輔兵を休めて三柏の旗を押し立ひかへたるか城兵の味方を追て進む所へ横鎧を入てか、れば城兵忽切崩さる浦上村宗高檜より是を見てあれ助けよと下知すれば鳥村修理亮菅牛彌兵衛卅余騎よて馳出て吉田浦上を助け戦ひ追つ返しつ終日戦くらして其日の軍はやみにけり明れば十三日伊豆孫次郎寄手の先登なりとて攻口に押寄れば城中より眞木越前今日の先陣を承りたりとて手勢三十人計遙に城を出て備を立兼て物かげに伏兵を置て敵か、れと寄手を誘ふ伊豆孫次郎伏兵あるとは知らず備を進めて打てかゝる一戦して眞木が勢たちまち打負引退けば伊豆競ひ懸て二町計も追立行

坂中計へ攻上る時時分はよしと物隠より伏兵起りて伊豆が旗本を目にかけ突崩す孫次郎切くづされて引退く眞木も取て歸して伏兵と共に追まくり一二町追討たれども寄手大勢なればかく城へ引取けるそれよりは城よりも兵を出さず寄手も攻ずして両陣まづまりてひかへけるが政村怒お堪ずして十五日の朝より惣勢城に押寄て一時に乗どらんと先巽の出し堀へ押寄埋草を以堀をうめ乗越々々蟻附して攻入らんとす城又は此時迄も静り返て寄手を近く引付て所々の高檜堀うらより差詰引詰射出しければあだ矢はなくて堀下に付たる寄手はらくと射落されまばした、よひたる所へ大手の門よりは宇野丹波東條兵衛浦上七郎兵衛搦手の内かりは眞木越前仁保清十郎佐鋪右衛門菊野小隼人突て出て打てか、れば寄手の先陣忽に切崩され坂より下よ引退く其中に松田三左衛門武任と名乗て返し合する城兵東條兵衛鎧を合せ戦て即時お松田を討取ればいよく競か、りて寄手を追ふ時よ完栗作十郎範高同弟神村作五郎範景士卒を下知して備を進め味方の崩る、を脇にして静々とし掛れば城兵仁保清十郎備を進めて完栗と渡り合戦ひけるか仁保はや戦勢たれば忽に切くづされて引退く清十郎は踏と、まりきたなし者共返せくと下知をなす所へ完栗眞先にす、みて朱柄の鎧を以て



仁保に突てか、れは仁保鎗を合けれども終に完栗に討とられける東條順格城中より是を見て大長刀を振て其勢百計にて突て出ければ寄手も是にためらひて猶豫まけるうちに城兵悉く引取て城戸をかためければ寄手も攻口を引取りける是よりは政村も本陣を船坂峠の池の上に移して近邊の山上に備を立旌旗を山風にひるかへしてそひかへける

## 赤松の陣へ夜討の事

浦上村宗股肱の臣とたのみたる仁保清十郎を討取れ大に憤り此吊合戦をなすべくと近來拘たる恐の者戸畑忠二郎鴨山勝五郎といふ者を商人に出立せ福浦より舟にて上方へ遣し兵具品々買求めて京都より商人の下りし舩にて兩人船坂山の陣に行ければ上下悉く取はやし胃槍刀等を買求ける故思の儘に陣中を見廻り潛に三石へ内通し又村宗此頃重病をうけて有よしなと民間より言ふらしぬ赤松方是を實と思ひ油断して有けるをよく見すまし菅生彌兵衛を大將とし夜討には人数の多はあしければ勇士七十人を撰び出して是に附て十一月十九日の戌の刻風はげしきに菅生が七十人山傳に船坂山の陣に到りまづかゝ忍ひ居けるに船坂の陣香西五郎か小屋へ忍の戸畑鴨山火を付たり西風烈しき時西の端なる小屋

ま火を放せし故忽陣く、に火うつりてもえ上る菅生彌兵衛此相圖の火を見るより関を作りて切り入四方八方へ働ければ赤松勢十方にくれ戦ふへき義勢もなく皆吾先にと逃て行菅生が七十人思ふ儘に切まはり大將を討取らんとねらひけれども完栗作十郎秋津宮内牛窓源六なといふ者返し合せ、防戦して大將政村は其隙に漸逃のびて宇根の宿までひかれける城兵宇野丹波守景泰も百五十騎の勢にて城を出て船坂の南の山に備てひかへけるか秋津十静坊か引取を見て追立けるに従兵はみなちり、み逃失ける十静坊思がけなき所より敵の攻かゝりしかはせん方なくいづくとは分からねども家來龜井彌八を連て山中よかく隠れ居て翌日敵散して後やうく八木山へたどり出灘村より舟に乗り赤穂まで落たりける名倉玄蕃は其夜沈酔して陣お臥居けるも俄に火は燃え上り夜討は入ければ長子次郎三郎父玄蕃を掻負ひて逃けるに敵急に追かけける故父をはわたりの岩陰にかくし置追くる敵に渡り合終にそこにて打死をしてけり其弟の名倉三郎四郎は切抜て父が隠れし岩かけに行引立退んどしけるお玄蕃大臆病者なりければ三郎四郎を敵ぞと思逃けひるに敵めては候はす三郎四郎也と言つゝ追行けるに聞もいれず逃廻りけるを敵見付て三郎四郎も討死す玄蕃難なく逃て山かけにか



くれ曉方ふ放れ馬の有けるを辛ふ打乗て落行ける三石の村宗も備を出して船坂を打越し赤松勢の散々になりて逃行を梨子が原まで追討し首數多取て明れは廿日の朝追行し人敵をまどめて三石へ引取ける赤松勢は山中所々にかくれ居て浦邊に出磯つたひして赤穂奈波の邊まで引取る者多かりける

備前軍記卷第一終

備前軍記卷第二

浦上宗久小塩へ内通附八塔寺炎上の事

永正十六年正月村宗三石城に楯籠り居たれ共去年小塩勢敗軍の後は政村再ひ攻寄へき勢もなくいたつらお日を送りけるか村宗か弟浦上宗久和氣郡香々登の城にありて西方の防禦せしか小塩より潜に使を立て宗久をかたらひ味方か來らは村宗の知行を殘らす宗久に宛行へしと言やりける又宗久欲心ふかき者なれば早速領掌して隙を窺ひ小塩とはかり合て三石を可討とは思ひなから顔色に出さずしてありし香々登の城の二郭を守て居ける宇喜多和泉守此密事を聞出して二郭を彌堅固に持て本丸の方を嚴く用心し三石へ使を立て宗久密謀ある事を委く告やりしかは早速加勢來て本丸を攻へき手立をせしかは宗久叶かたく夜に紛れて城を忍ひ出て備中へ落行ける其の跡の本丸には三石より來りし加勢の兵を籠めて守らせける宇喜多能家は謀にて事故なく城を取り固宗久か跡を能家かはりて城を守りける其年の夏四月小塩より兵を出し老臣浦上因幡守は梨子ヶ原に出張り完栗作十郎は八塔寺の山に陣取て是は三石城の北より押寄て攻んとせしに三



石にても是を聞真木越前守に人数をそへて兵をひそかに八塔寺の邊の民屋に出しかくし置ける同月廿九日雨ふりて暗夜なるを幸にひし〜と出立先八塔寺の山門に火を付けるに山風つよく火をふき付て本堂も燃上れば暗夜も晝のごとく小塩勢の陣をてらしければ越前か兵此あかりにて所々より敵陣へ思ふまゝ、よ討入切まはりければ小塩勢一さ、へもなく追立られ完栗か兵上月の城まで引取ける越前は敵の首廿一討取り勝鬨をあけて三石城へ歸りける

## 赤松政村再三石城を攻る事

同年冬又政村三石を攻んとて此度は諸事謀を浦上因幡守村國にまかせて完栗秋津等とは軍の相談なかりければ以ての外お憤りて秋津は病と稱して己か領知へ引入る完栗は當夏夜討にせられし後も猶八塔寺に陣取てありしかどもさのみ勵み戦ふへさども見へさりし其根元は去年小塩勢敗軍の時二首の狂歌を言ふらしける

赤松の千とせの數を遣しと逃て命をつかれけるかな

久馬十郎左衛門も大將より先に這く逃しかば

大將の側近氏も逃うせて久馬のさし山更に甲斐なし

此哥どもを久米近氏聞て思ふ様是は完栗清水秋津等退日よ功ありし故如此大將並久米が身の上をもあさけると大に服立してわりもわらぬことども様々いひて完栗秋津を讒言す是によりて政村是等の老臣をうとみ此度の軍奉行を浦上村國一人にまかせらる十二月廿一日浦上因幡守村國を先陣として赤松上総介政村小塩を軍立し三石の城へ再び責寄らる城中は静りかへつて寄手を待寄手の先陣浦上村國五百余人持楯を被きつれ三石の城の東に押寄鬨を作る政村の旗本もつづきて押寄先陣崩れは入替りて攻んと備を進む先陣村國已に城に付て攻るをみて村宗みつから兵を下知して大石をまろはし水をさりなかし防さければ寄手少し漂ひて見へし所を城中より浦上七郎兵衛城戸を開て兵をす、め先陣村國か備を駆立れば奇手ひらきなひく政村旗本を進め去年の負軍の辱をいつの時にか雪へき一足も退す皆打死せよと聲をわけ兵を勵して打でか、れば七郎兵衛も進かね色めき立所を城中櫓の上より村宗是を見て松の字の旗を立てるは大將政村と見ゆるそわれ討取と下知すれば宇野丹波東條入道順格佐輔右衛門菊野小卒人等七郎兵衛をたすけて打て出る七郎兵衛是に力を得て爰をせんと、戦ふ寄手も今を最期と攻戦て何れ勝負も見へさる所に搦手の城戸より真木越前守貞邦並菅野



花房等打て出て赤松勢の横を討ければ終に寄手戦ひ負て引退く大將政村ふみ留りて戦しを近氏すゝめて引退まめければ諸卒誰かこらへき我先よと逃て行三穂田新右衛門只一騎取て返しければ是をみて必死を期したる者共十四五騎返し合て追くる敵を支ければ城兵等進み得ず三穂田四面に當りて戦ひ終に討死したりける其ひまゝ政村もやうく引取人數をまどめ備をなす城兵宇野東條も諸卒をまどめ早く城に引入ける其後は播州勢も攻んどもせず三石の四方に陣を取て唯遠攻にして居たりけるが香々登の城の宇喜多和泉守同月廿八日和氣郡新田庄安養寺も勢揃をして其勢二千余騎已に播州勢の後を討んと扣たりといふこと寄手の小塩勢に聞へたれば大將政村是を聞て宇喜多大勢にて後攻をせば逆も勝利有へからず一先退て來陽進發して浦上を退治すへしと諸手へふれて同廿九日船坂梨ヶ原の陣を引て小塩へ歸陣也三石よりも跡を追て足輕をかけたれども浦上因幡守よく後殿して引取ければさのみ三石勢も追はずして兵を入ける

## 小寺と宇喜多作州合戦の事

明れば永正十七年正月政村小塩の城にて軍評定して三石に属したる城どもを攻らる先宇根の城に浦上因幡守を置いて三石を押へて松山の城に村宗か一族小寺長

門守村氏籠たるを攻させけるに五月に及て落城し長門守は爰を落て三石に入る又作州の壘に中村五郎か村宗に属して在けるを小寺加賀守範職をやりて是を攻れば三石より是をすくはんとて宇喜多和泉守に二千余騎を附て七月三日に三石を出て同八日作劔飯岡原お至り小寺加賀守も戦ひ和泉守小寺を追て河水に追込數拾人を討取河を隔て陣を張る小塩に又是を聞大勢を集て作州へ出張て小寺を助て宇喜多を討んとす三石に又是を聞て浦上村宗みつから二千五百人を帥て作州へ出て岩山の南に陣をとり播州勢と對陣す宇喜多も村宗の陣と一手になりて陣しけるか播州勢日を追て大勢かさみけり是を見て見恐やえたりけん三石勢一夜の中に落失て纔に七十余人残り留りける時に宇喜多和泉守是を敵に見透されては叶かたし其うちに戦へども翌日早朝に残り留たる七十余人の勢を以て數千の播州勢又一文字と打て懸り忽ち追崩し勝鬨を上げて引取ければ其勢を見て落散たる兵卒一日かうちに一千余騎又集りて對陣す村宗計畧をめぐらし敵陣小寺か家人野澤主計介といふものをかたらひ反忠をさせ小寺範職を討相圖の火を上げれば村宗一千余騎を三隊として小寺等か播州勢へ討てかゝりければ忽ち小寺打負散亂して落行ければ三石勢思慮に追ちらし追討して首三百余級を得て勝鬨を作



り三石の城へそ歸りける其時政村小塩を出て作州へ越んとて白旗城に至て勢揃せし所へ小寺敗軍せしことを聞てひなしく政村小塩へ引かへされける

## 赤松政村入道して小塩退去の事

政村度々の軍より打負其上老臣清水甲斐守政國秋津宮内少輔秀國完栗作十郎範高等を久米十郎左衛門か讒言せし故君臣不和となりて清水秋津引籠り完栗も手疵を痛よしを稱して出仕せず其外赤松黨三十六家といふ者も多く主人を見限りて相そむく者多ふして重て兵を催し三石を攻へき手段もなりかたく日を送りける中よは浦上村宗へ心をよせ内通する者も又多かりければ小塩上一和せざる事具よ三石へ聞へ村宗も是を聞時至りぬと思ひて潜に小塩へ使を立て古政則の後室へ申遣しけるは浦上村宗事赤松累代の長臣おて尤代々忠功を盡し候所今佞人の爲に讒せられ止事を得ずして三石に一旦籠城仕候へとも全く以屋形の義疎畧よは存奉らず候主人は一代家は末代よて候へは當屋形世を退て隠居ましまさは若君を家督とし以前のこごとく輔佐の臣となりて赤松家長久の謀を廻し可申と言葉を盡して言やりければ室家兼て夫婦の間不和なれば母堂と共に村宗も同心の返答に及び又老臣秋津清水完栗等に此旨を言聞せけるも皆同心して政村を押

隠居とし小塩の別館に蟄居せしむ政村も心ならされとも力及はず薙髮して常印と稱し永正十七年十一月赤松政村の嫡男才松丸當年七歳なりしを播備作の國主と稱し浦上村宗も三石より小塩へ出仕し政事を思儘にとり行ければ久米十郎左衛門も難の至んことを恐れ其外にも小塩家中退去する者多く小塩城下静ならされは幼主才松丸並政則晴元女後室政村の室とも小塩を出て皆三石城へそ移られける是故に小塩の赤松の老臣を始め皆三石へそ出仕して殘る者どては常印に身近く従ひつかへけるもの計儘に残りければ常印も小塩の住居もまかたく同十二月廿六日の夜恐ひ出て舟に取のり明石へ至り榛石といふ所に着き衣笠五郎左衛門を頼みて再び望を達せんと近臣を分け遣まて譜代の臣を相催されければ弘岡左京別所孫二郎則定宇野勘由村範大石民部丞香西少五郎秋津孫四郎國苑同十静坊久米十郎左衛門等の浦上村宗に背けるものども集りて百五十余人衣笠か家を警固しける明れは大永元年赤松幼主才松丸後室等三石の城にて越年して居られけるか常印去冬小塩の館を出て兵を催し又三石へ寄らると風聞有しかは再合戦出來りぬと三石の城中城下も周章する事限なし浦上村宗是を聞何とぞ合戦に及はずして静謐ならんとを計り大瀆の妙覺寺の日興といふ僧を呼かたらひ頼ける



は弘岡左京は和僧の従弟也弘岡此度常印の催に應じて此表へ發向の事を謀ると聞ゆ和僧榛石へ行て密に左京をかたらひ味方に引入よ交ならば恩賞は望に任すへし尤左京にも只今迄取り來る本知に倍して所知を行へしとありしかは日興則領掌し三石を出榛石へ行左京に其よしを言かたらひしに左京忽心を反して浦上方になり其手の者皆左京に相またかふ又別所孫二郎は此度の先陣を承りて加子川迄出張居たりけるか是も相背くと風聞す衣笠申けるは別所と浦上常に不和なれば一味の事はあるへからず三石より謀にははする事ならん常印驚給ふなどいけるか久米十郎左衛門來て弘岡左京こそ村宗に組し其手の者みな敵になりぬと聞ゆかくてあらはいか成變も計かたし急き陣を替へ給へど告ければ常印大きに驚きさらば爰を去て暫く山林に隠れ時節の至るを待つへしと衣笠か家を忽ひて出られければ隨從せし兵士みな思々に散亂す左京か手の者どもはその逃ちる者を追掛く十余人討取り是を此度の左京か高名にして三石城に行ければ今迄の領知の上赤坂郡にて加増の所知を與へしとぞ

義晴將軍播州より上洛並常印小塩へ歸り弒せらるゝ事

先の義澄將軍の二男義晴は播州に下り小塩に居給まひしか常印小塩を出られし

時どもに爰を出給ひ常印と一所に書寫山の奥にかくればはしますしかるに去年細川澄元卒して當將軍勢衰へ戦利あらずことし大永元年三月廿五日に當義植將軍都を落て阿波國へ迂り給ふ後年に阿波國にて薨給ふ故に島の公方といふ其跡には細川高國京都に在て權をとりしかども將軍なければ是を迎んために高國より三石の浦上村宗へ使を下して故將軍の御二男義晴播州まかくれ居給ふ今度將軍になし奉るへし御供申て急き上洛あれどそいひ遣しければ村宗大きに悦ひ我家の起るまゝしやと思ひ仰承りぬと返答しけれども去年よりは常印とは敵味方となりければ卒爾に義晴の御供して上洛せん事叶はず之依て又常印入道へ三石を使を立て申しけるは公方の若君今尊公の御もとと御座候よし承はる此若君を渡給は、向後和睦をなし以前のこどく君臣の禮をなし奉らんとありければ常印今はあるかなきかの跡にて山林に身を隠し忍び居たりしかは即同心有て若君をともなひ出て村宗と和議と、のひ小塩へ再ひ常印を迎へ室家母堂才松丸も皆三石を出て小塩に歸り住れければ上下安堵の思ひをなしけるかくて村宗は同年六月朔日將軍の幼若義晴を供奉して三石を發足して京都へ趣く其行莊の花麗いふ計なし同月六日申刻幼若上京ましますやかて左馬頭に任せられ十二月廿四日元服加冠は細川武藏守



得平記曰菅野  
花房押入常印  
を討果岩井彌  
六左ノ手ヲ切  
ラレ手首ヨリ  
落際レナキ  
ニテ随分御働  
候ヘ正不叶御  
果候

高國奉りて義晴と申明日廿五日征夷大將軍の宣下わり高國管領お任せらる將軍  
時ふ十一歳とぞ聞へける浦上掃部助村宗將軍の供奉して上京せしかは大威を  
振ひ在京して明る大永二年の春三石に歸り小鹽に至りても其威勢いよく強大  
にして主人常印入道をももの、かすともせず老臣以下の面々をは臣下のごとく  
にわしらいければ常印をはしめ赤松の舊臣とも掃部助を悪む事甚し村宗是を傳  
へ聞てとても君臣一和せんこと叶かたし災の身に及はざる以前に常印をはうし  
なふにはまかしと思ひ其身は三石へ歸りて後に浦上か臣岩井小平治花房菅野三  
人を九月十七日の夜常印のもとへ遣し内談の事ありとて近習の人を拂ひ密談に  
及ふりをなしたちまら常印入道弑して早く出ければ三人共事故なく三石へ歸り  
ける是によりて小鹽又大きに騒ぎ出て居城なりかたく浦上因幡守村國完栗作十  
郎範高小寺藤兵衛職隆伊豆孫二郎等幼主才松丸を守護して小鹽を落ち小舟お取  
乗り淡路に落行ける浦上村宗は己か思ふまゝ、に其跡を治め播州も西半國を取治  
め備前も吉井川より東はもとより己か領知とし其はしめ松田と備前を争ひけれ  
ども浦上か勢ひ追日つよくなりしかは松田は尼子が旗下となり又備後の山名を  
頼みて西備前の地を奪れざる計畧のみよて浦上と戦ふ事もなかりけるかくて常

得平記ニハ政  
村ハ晴政ノハ  
シメトス

印をは書寫山に葬りて祥光院了堂性因と法号をおくりける  
一説に常印を弑せしは播州室津よての事といふ此時常印廿八才と注せしもの  
あれども明應二年家督の時七才といふを以てかそふれば實に今年三十五  
歳なれば此説も叶はず又重編應仁記も義村を父とし政村を子とす此説も不  
審し政村を初は義村といふ則常印の事也其子は晴政なり是も初は政祐とい  
ふ政村は左京大夫といふ、又兵部少輔と書たるものもあり初は上総介といひ  
しといふ又二代共に幼名を才松丸といふ親のねさな名をうけて名付しにや

赤松左京大夫政祐小鹽へ歸り住する事

浦上因幡守村國完栗作十郎景範伊豆孫次郎則定等才松丸を守護して淡路にあり  
しか此幼主もはや十一歳なれば元服をなし左京大夫政祐と号して同年十一月兵  
船を催し播州へ押渡り福泊に着岸し大貫山に陣を張り村宗領分へ焼働して戦此  
由三石へ聞へしかは村宗も勢を催し宇喜多和泉守能家を先陣として三千余人大  
貫山へ押寄村國景範則定に對陣すまかるに但馬國山名次郎政豐此處に乗して播  
州を切取らんと永良表より小林大田垣等を先陣として亂入す三石勢も此兩方の  
敵に周章して有けるを見て浦上村國より使を立村宗へ言やりけるは今同姓の親



族を背て對陣に及こども全く赤松の家を起すへき爲にして私の儀にあらす然るに山名に國を奪れんこと後日に臍をかひとも甲斐なからん和睦をなし幼主を立て相とも山名の勢を退へしと言やりければ村宗も早速同心して互に誓紙を取かはし三石よりも再び赤松政祐を播備の太守と仰きて山名か勢に打向かひ對陣すれば山名も利を失て軍を入れれば左京太夫政祐又小塩へ歸り住して兩浦上是を守護してまはし戦もやみにける

宇喜多能家父子播州にて勇戦の事

かくありて小塩も辭になりしかども始終一和すへき村宗とも見へされは浦上村國又三石を可討のはかりことをなし小寺藤兵衛は五着の城にありて村國と共にはかり先政祐を守護して時を待けるに三石に其趣をもれ聞てさあらは此方より先して兵を進め村國又小寺等を打亡へしとて大永三年の春村宗三石を打立宇喜多四郎能家二男かを先陣として播州へ發向す村國も是を聞て三百人を卒して是を防ぐ其時餌兵をかけて敵を誘ふ先陣の宇喜多四郎未若年なれば其謀をも辨せず軍をすゝめ頻に是を追ふ村國よき場かに伏兵を置て四郎を前後より取巻たちまち討取ける父能家は四郎を討せて悲情も堪す自ら先にすゝみ敵陣へ馳入しかは從

主を討せしと一同は村國か備へ打入爰を最期と戦ければ村國か兵忽敗軍して東をさして引退能家みつから敵を討事八人其余首級百計を得て引取ける其後も猶せり合絶さりけるか村宗思ふに主人に對して戦をなす故にはかくしき勝利を得さると思ひ赤松寒松斬といふ一族丹波にかくれ有しを三石に招て大將に取立度度播州へ軍を出し戦しかどもさらお勝敗わからす寒松斬も野間といふ所にて討死ありけり借て宇喜多和泉守勇戦のすくれたる事を細川高國遠く聞て大に歎賞して河原林某といふものをして名馬一疋に名ある笠を送りけるされども愛子にねくれ又老衰もしければ其のち能家たのか居城邑久郡砥石城に引込薙髮し常玖と号して老を養ひて居ける

播州依藤ヶ城を攻並柳本彈正被殺事

享祿三年三木釜山城主別所加賀守就治柳本彈正等播州依藤ヶ城を攻たりしか六月晦日の夜入て柳本か家僕主人彈正を殺しけるそれ故別所か陣迄も騒き立ける是を依藤ヶ城より見及て兵を出して寄手を討ければ一さゝもせず敗軍す城兵は是を追討よして首百余級を討取引取けるかくのことく播州物忽なりければ浦上村宗其虛に乗して三石より打出小寺の城三木の別所城有田の城等と攻戦ひて



打取首一千余級を得て三石へ開陣す又備前赤坂郡上道郡にては松田左近將監と  
追合どもありて月日を送りける

## 浦上村宗攝州出陣並討死の事

まかるに細川武藏守高國入道道永は去る大永七年桂川敗軍の後伊勢國司村親公は  
道永の聲なりければ是をたのみ其後亦山田の神主山田大路か家に蟄居して常桓  
と号を改め居られしか何とそして今一度義晴公を將軍と備執權して天下を掌握  
せんと山田を立出江刃佐々木を頼み越前へ越ては淺倉をかたらひ又雲州に至て  
尼子を催促しけれども皆是も應せされは爲方なくて備前へめぐり三石ふ來りて  
浦上村宗を頼みける是は先年義晴公を供奉して播州より上落せし後推舉す預り  
し事多かりしかは一議にも不及同心し又村宗所望しけるは文明の頃武衛家の臣  
たりし朝倉太郎左衛門敏景に越前國を賜り守護大名の數に列せられ忽倍臣を離  
れ諸侯國主の身となり其後孝景に及まで御相伴衆たり此例を以某村宗も此功を  
とけなは播州の守護をゆるされ將軍家直參の大名の數に入られなんやと望けれ  
は常桓聞て今度勝利を得は此條子細わらしどかたく契約ありければ村宗大きに  
悦ひ纏て播備作の兵を集め享祿三年八月村宗其勢三千余騎にて三石城を發し攝

州に出陣ある細川常桓は先達て三石を出て諸浪人等を駆促し兩家同月廿七日に  
攝州神咒寺に陣取細川晴元一味の城々ども攻んとす伊丹城に高島甚九郎池田の  
城に池田筑前守富松城に藥師寺三郎左衛門等楯籠り常桓の勢寄來らは引請一戰  
せんと相待ける九月廿一日に先富松へ朝懸して一時攻にして攻落し藥師寺か者  
ども廿余人討取軍神の血祭よしといさみ進ける三郎左衛門は爰を落行是を晴元  
へ注進しければ山中遠江守と和泉國人を附て加勢とし尼崎大物浦を守らせ堺に  
ありし軍勢を以久々知酒部に陣を張けるか十月十九日常桓伊丹表にて相戦へは  
伊丹勢打負井上新八郎を始卅余人討死しける十一月六日には大物へ取懸ければ  
藥師寺は降參し山中遠江守河原林左衛門尉は討死をとけ其外五十余人討れ殘る  
者共は中島へ落行けり常桓は爰にて越年して明年四月二月下旬伊丹の城を攻あ  
つかひになりて城主高島甚九郎城を出て池田へ退く是につゝきて三月六日に池  
田へ取かけ攻けるに阿州の侍有持等二百余人討死して落城す東條又四郎波多野  
孫四郎は一且城中を切抜出けれども敵去きりに跡を追ければ山田といふ所にて  
自害せり此勢あては常桓浦上村宗もつゝきて堺を追落し都へも切て上るへしと  
を見へける三月十日諸軍を帥て淀川尻を打渡り先陣は住吉古妻と屯し常桓は中



島ふ陣をうつし居たり堺にては此大敵を引うけども防戦叶かたしと評義して一先四國へ落行へしと其支度せし所へ兼て催し置ける三好筑前守元長四國勢一万余人を引卒して堺津へ着陣すれば晴元を始諸勢大に力を得て此勢をあわせ陣しける其中より早雄の若者どもは足輕をかけて追合けるかいかさま一戦して勝負をこゝろみんとて先陣の者播州勢の先手へ討てかゝり戦ひしか忽打勝て谷福島などいふ先手の兵を討取其外八十余人の首を取て引取ければ住吉に屯しける浦上か先手たまりかねて天王寺今宮木津へ引退て陣を取るされども常桓は浦井に陣取浦上は野田福嶋に陣取て両家二万に余る勢なれば近日堺へ押寄んとはかりける所に又三月廿五日細川讃岐守政之八千余騎にて堺浦へ着舟す其上島山か家老木澤左京亮長政常桓の味方より來り隨一ととたのみし者なりしに忽心替りして晴元へ降參し堺津へ來り加るかゝりければたやすく堺へも寄かたかく對陣してまはらく合戦もなかりけるまかるに堺津にて今は此大軍になりたれば最早敵を待こと有へからしいさ押寄戦んとて五月十三日細川興隆は筑島へ打出陣を取三好元長は住吉遠里小野に屯す三好山城守は吾孫子刈田より陣取其勢併せて五千余騎細川讃岐守の八千余騎は堺に其儘陣取て晴元を守護して毎日天王寺の敵陣へ

足輕をかけて矢軍ありこゝも赤松政祐今は左京大夫晴政と稱して浦上政國等守護してありけれども勢衰て播州小瀬の居住もなしかたかく近年は美作國久米郡原田村の新庄山に城を築きてありしか此度兩細川攝州の合戦にて浦上村宗も出陣せしことを聞晴政よき時節到來す今の微勢にてはとて父常印の敵村宗を討事叶かたし此時出陣し晴元より一味し其力をかりて浦上村宗を討て仇を報せんと播州作州の舊臣を集めて晴元へ内通し六月二日先神咒寺迄出張て陣取此事村宗か陣へ聞へければ一旦浦上へ從ひ居たる赤松舊好之侍吾もくんと神咒寺の赤松の陣へ加りければ浦上か勢日を遂て減少す常桓是を聞天王寺の陣人數少くては不叶と自らも天王寺近く陣替して勢は衰たれども敵よせば有無の一戦をなすへしとひかへたり六月四日三好勢先陣として天王寺木津今宮へ押奇て攻戦ふ浦上村宗先を駈氣常桓禪門後陣を誥て必死を究て渡り合し故三好勢も攻わくみて有し所も晴元の舅江州佐々木より加勢として八千余騎二手おなして阿部野の方より攻來れば天王寺にもはや防戦ふ力盡き浦上村宗眞先に進んで討死しければ浦上に属從ける兵卒三百余人討取れ残るものとも右往左往へ逃行を野里川に追込れ水に溺て死ける浦上勢も五千余人とを言傳ふ常桓の第一宗とたのまれし細川



和泉守護元有伊丹勢兵庫助國扶川原林日向守藥師寺三郎左衛門波々加部兵庫助南條肥伊守香西越後守等枕をならへ討死し其外は野里川を越て落行所をこ、かしこにて討取る、者も二千余人に及ぶ其隙に常桓禪門ははるくに落行く尼崎の町家の京やといふ者の所に隠れけるを三好山城守聞出し探しとらへて境へ注進し同八日遂に大物の廣徳寺にて切服ある浦上ととも天王寺まで討死せし備前侍のなかにも近藤平六兵衛盛久といふもの當陣云かひなく切崩されし事を無念に思ひ其所を引もさらす天王寺の塔の七層へ上り切服し木刀を唾へ真逆さまに落て失にけり島村彈正左衛門貴則も村宗をはしめ備前勢敵を盡して被討しを口惜く思ひ齒かみをなして立たる所へ佐田岡平治吉村十郎といふ敵二人討てかゝるを飛かゝり取て引寄左右の脇にかひ挾て汝迷途の供せよと言て野里川へ飛込死にけり此島村貴則か亡靈化して蟹となりしといふけにも其時より其所お人面のことき蟹出來ける今に其攝州野里川にて嶋村蟹といふて有は是なり

赤松晴政歸陣并浦上村宗か子二人の事

赤松晴政は尼か崎の方へ兵を進めて浦上村宗か兵の敗軍して落行を猶討取り父の仇村宗か討死をよろこひ歸陣して又播州小塩へ歸り往す又浦上村宗か討死の

死骸を三石へとりかへれば嫡子與四郎政宗次男與二郎宗景是をとりたさめ和氣郡木谷村に葬り書寫山にて追善ともなしける今も其塚残り法名は桃岳祐林といふなり此兄弟の時になりてはいかなる故か三石城には人數をこめて守らせ播州室津の城に兄弟ともに移りけるか程なく兄弟の中不和になりて與二郎宗景は大田原與三左衛門日笠二郎兵衛延原彈正明石飛彈岡本太郎右衛門服部備前六人を連て室津を立退き和氣郡田土村天神山の城にて移りける其後は東備前又作州も二郡はかりはみな宗景にしたかひ和氣郡本庄の小中山の森源七郎森村の森中勢平松村の恒次五郎左衛門同藤兵衛曾根城の明石大和守景行等皆城を築て天神山を守護す戸田松の浦上近江守國秀又三石城もみな政宗をそひきて宗景にしたかひければ室津の浦上掃部助政宗は弟の與二郎宗景を討へき爲ふ享祿五年天文元年なり其勢二千余騎を催して備前に向ひ二手に分て嫡男小次郎清宗は舟五十余艘に取のり海上より押寄三石を攻此城は此頃まで皆住居せし所なれば案内をよく知りて即時に責破り夫より片上に至り土田松の城を攻けるに浦上近江守降参せまかは政宗すくに其土田村の城を本陣として其東の山々陣を取る天神山よりも宗景人數を出し片上の葛坂を隔て度々せり合われども更に勝負もなく日を送り



けるか宗景も退屈して先天神山へ陣を引取る政宗の兵跡をまたふへしと思ひ宗景伏兵を置たれどもあども追されは事へなく宗景天神山へ歸ける政宗も土田松三石も兵をこめて室へ歸りける

宇喜多常玖を島村殺す并宇喜多家の事

邑久郡砥石城主宇喜多和泉入道常玖同郡高取山の城主島村彈正左衛門貴則は浦上か家にて股肱の臣なりけるか宇喜多常玖は老衰して砥石の城に引籠り島村貴則は攝州にて討死す常玖か子奥家とい、て家は繼たれども愚昧にして用に立す島村貴則か子島村豊後守計残りて浦上の家の仕置を獨してはからひけるか天文三年六月晦日先君の遺命なりとて島村豊後守俄に砥石の城を襲て宇喜多を討けるに折ふし城中無勢其上不意の事なれば忽城を乗とられぬ常玖は老病に犯され行歩も叶されはせん方なく自殺す奥家は愚なる上に臆病にして是を防戦へくともせず城を逃出てける奥家の嫡子八郎は當年四才なれば乳母抱てやうく逃出て福岡へ落行ぬ宇喜多記八郎は享祿二年出生能家入道常玖の死骸は城のつゝなる大鹿嶋の山に納めける能家入道の塚今にあり所の者は常玖存生の中我像を畫去め南禪寺の僧參兩宗成を頼其像の上に行狀を書もらるて邑久郷の向岸

寺よ納め置ぬ向岸寺は今廢して其畫像今其文曰

知勇兼備功名遂全本貫爲百濟王兄弟曾來兒島中古立三宅姓雲仍洞酌和泉恭而安温而勵行無邪言無偏進思尽退思補管仲匡齊桓有封邑於十余世攻必取戰必勝韓信附漢祖延炎運乎四百年一鄉懷寬和從闔國伏雄畧權屬赤松軍挫松田兵出下畧用上畧依則宗命祖宗助左有一天無二天荆樹風吹厚同株好蘭蒸露湛餘繁花妍君々臣々南山可移節義勿易父々子々東海雖竭忠烈豈遷規摹遠々瓜瓞綿々殺活縱橫著々揮金剛劍摧魔群隊與奪自在念念々張禪那弓鳴神通弦看々禪祥家給椿齡永奕葉春秋雨八千

竊案和泉之前司能家之牒上世居乎百濟國甫兒眩兄弟三人泛舶來干備前一島始厝新第旗幟皆書兒字爲紋異仍其所曰兒島焉中年立姓稱三宅而有武名諸孫瓜葛乎備之縣卿邑而号宇喜多地利乎人和乎鳥乎命乎昔文治之比丁源平騷亂之日與佐々木三郎戰藤戶浦異比年歸紀氏代爲股肱近頃明應六年江州前司紀宗助畧地干備之伊福郷軍不利退禦嶮松田之兵圍之四面能家獨身入宗助壘身被堅執銳和戰四十一日勝鹿田軍群敵解圍而去矣宗助島十餘人之首凱歌而旋焉八年紀則宗美作前司禍起蕭牆與播之東軍戰退日山陣入白旗城親族群臣首鼠不爲者夥矣能家切齒勵聲曰人



生一也之間焉能央々有二乎乃歸則宗衆皆愧能家言而屬則宗則宗於爰與幼主而入  
 下野前司源政秀之播之鹽屋壘力戰數矣據相府臺命細川故右京兆政元差中使求東  
 西和議三國離心頓休矣文龜二年戰于備之矢津能家一身單力而斬有松伯其徒二人  
 之首焉三年於備之收石原屢戰蒙疵斃勅敵有功矣永正十五年紀村宗以事入三石壘  
 群下有聽水不決一焉能家寧爲牛後卒不作佗方臣誓歸乎村宗細川今京兆高國投書  
 感忠議至誠矣十六年村宗舍弟宗久在香々登壘與阿兄絕矣能家在彼乃通書告諭乎  
 村宗而曰臣若出壘則必有事一夕脫而往備西縣矣同年十二月能家將精兵二千余陣  
 乎新田安養寺侵掠園三石播軍之後而勦力乎村宗焉播軍忽解圍而退矣十七年七月  
 八日戰勝于作之飲岡原敵軍溺死河水者數十輩斬首有級矣十月三日村宗入作陽陣  
 乎岩山南能家將二千餘從以敵軍如雲其勢難當士卒皆散終殘者七十人同四日能家  
 一戰而勝同七日敵軍瓜潰矣村宗斬敵百人首歸于三石大永二年播東軍紀村國以下  
 從淡入播壘于大貫山村宗則圍其左右者數重矣于叵但之守山名次郎乘間入播之永  
 良東西軍互計而請成焉蓋指吾邪讐而與佗山名之軍決戰也既而和議就矣翌年村國  
 變約桃戰能家據嶮半日程小男四郎先倡而戰死矣能家直欲入軍中決誅死敵軍忽潰  
 斬數十百人首歸村宗軍焉細川家臣河原林等視而聞之高國乃以書感其功于後從村

宗至高國則賜湛盧之精泛駕之騎能家長跪受焉寔衰花之榮也以至則宗宗助村宗遣  
 數箇書而固傳家不可遺之盟匣而秘之僉曰軍中一韓也矣山野出入紀氏之門者五十  
 年余以故衆臣皆有耐久々故意能家法諱常致予字之曰立仲奇斯像求賞辭不勝固辭  
 書拙語以條理數件功勳右云爾  
 時大永四年歲在甲申秋八月吉辰

前南禪金剛幢下叅兩叟九峰宗成

此宇喜多和泉守三宅能家本其先百濟の王子コキソより出て此百濟の王子を日本記姓氏  
 り三宅を以て姓とす此三宅といふは備前國兒島の地名なり録等には新羅の王子と記せ  
 順和名抄には三宅兒島にて東の地廿  
 を三家と書たり其王子天日槍の後胤邑久郡和田といふ所に住して和田備後守範  
 長其子兒島備後三郎高德其一族をまたかへて元弘建武の亂又南帝の御味方に參  
 りて忠戦をなすこと數度に及ふしるるに建武三年五月又和田備後守範長播州阿彌  
 陀宿にて討死し其一族も多く爰に死たりし其時三郎高德はあとの四月備前の國  
 熊山の戦ふか手負て旅行叶かたく播州坂越の邊の僧房に残り居ける故生残り  
 てありしか其後に伊勢の國にうつり又三河國加茂郡又行て往ける按に北島准后  
 伊勢國司顯能卿にしたかひて征東將軍宗良親王につき奉りて親房卿の三男  
 伊勢三河等の國に高德もうつり行けるにや爰にて男子三人を







りて後播磨へうつりしに於此故に兒島の地名を以て三宅連と姓を給ひしなる  
へし又河野或稻葉の家傳には孝靈天皇の皇子伊豫皇子お三子あり一男は大  
島諸山積明神是大宅氏の始祖也二男は備前國兒島に住す其地に家三戸あつて  
養ひ奉る故に三宅を以て姓とす是三宅の始祖也三男は越智親王と申是越智姓  
の始祖にて伊豫國の河野等はより出たりと言元弘の京軍の時兒島と河野は一  
族なりと太平記に書しも此説によりしと見えて古き家の説なれども孝靈の  
皇子に伊豫皇子といふは日本紀にも紹運録にも見えず桓武の皇子伊豫親王  
れどもはるか後の事にて此説いふかしかければ日本紀姓氏錄の本説等に是し  
ごとく三宅の姓は天日槍より出たるといふまがふへからざる事に於

又和田備後守範長は姓三宅稱号は兒島ともいふ故に兒嶋とも三宅とも記せし  
もの多く其子孫も兒島と名乗るまかるる範長を佐々木の余流といふ説あり  
家中國太平是は大なる誤なるべし天日槍の後三宅の姓にて宇喜多と同姓なる  
圖記等に  
事諸記に注せる事明かなり

備前國所々城主并海賊の事

かくて島村豊後守は砥石の邊宇喜多の領地を押領し浦上家の事は島村ひとり仕

置し威を振ひ其身は其儘高取山に居城し薙髮して貫阿彌といふ砥石城は浮田  
大和守を置て守らしむ其外天神山の旗下の城は曾根城明石大和守景行日笠の青  
山城に日笠次郎兵衛頼房さどら山城日笠甚左衛門神根のいわう山城高取備前  
大中山城中山五郎左衛門働の城明石飛彈赤坂郡には周匝村城に笹部勘二郎是里  
の山鳥城に平賀大進佐古谷城に額田喜介磐梨郡熊野保木城には明石源三郎弟大和  
坂根に明石右京肩背に岡豊前田原城に浮田土佐殿谷城に小野田左馬進邑久郡虫  
明城に虫明藏人西須惠城に鳥山左馬邑久郷城に浮田五郎左衛門尾張城に鷲見越  
中等也又金川の松田か廳下の城々は矢坂の富山城には横井土佐を置て守らしめ  
舟山の城は須々木豊前高柳城には中島左馬頭津高郡虎倉城伊賀伊賀守三納谷城  
には高見小四郎尾原城には新山民部百坂山城には菱川右京赤坂郡西谷城には松  
田彦二郎伊田のうな山城には長崎四郎左衛門殿谷城には難波八郎左衛門高尾山  
城には菊田四郎左衛門かうく山城には岡與右衛門大鹿の瀧城おは草加五郎兵  
衛上道郡沼城おは中山備中平井城には平井助亟四山城には寺井十左衛門御野郡  
岡山城には金光與二郎イ此頃備前國中乱れぬ所もなく東は浦上政宗同宗景兄弟  
地をわらそひ西は松田地を治て尼子に属して浦上と戦ひ備中の毛利麾下と戦ふ其



余兒島郡は讃岐國の細川家にまたがひ胸上城小串城には高島和泉守高島源太兵衛利生の城には四宮隱岐守等守て又西兒島は毛利家にまたがひて城を守て更に攻守の隙もなく夫のみならず兒島の南の海上には島々多くものかげあれば往古より海賊をなすに便よくて往還の舟世々其難に逢ふもの多し今乱世に乗していよゝゝ海賊横行する事隙なし其海賊の集りける所なかに兒島郡日比と邑久郡犬島となり故に其頃日比關犬島關と唱て海路通行の難義の所とせしか大船に大黒丸夷丸といふ舟ありて是にて渡海すれば海賊妨ぐるることなし其外も此舟お屬せしよしを言て金銀米錢を出して通行せしといふいつの年にや戸板の某といふ周防の國司なりし人犬島に舟かゝりせしを海賊是を殺して財寶を奪取りければ此戸板某の子親の敵を討たむとて兵船を催し犬島に押寄せ海賊のかくれ住ける岩穴の邊を取圍み薪木を穴の口につみて悉く焼殺しけるといふ此事は世に聞えて謠曲にも作りて戸板といふうたひ則此事也其外藝州の穂田備中守難風に逢て犬島に舟をかけしに海賊の爲よ殺され財寶を奪はれしといふ又永正の頃にや藝州武田判官元信の臣温科左衛門家親といふ者上洛して歸りに此犬島の海上を夜中に押通りけるが例のことく左衛門か舟へ海賊の舟をひたくとれし付財寶を

奪取んとせしにこの左衛門世には三十人ガ力あると言ひしほどの大力なれば帆柱のけたを取舟お乗りうつらんとせし海賊を打倒し其帆げたを取直し賊船を突ければ忽二艘をつき沈む其勢にいかでか敵すへき残りの舟ともみな島かげに逃隠れければ温科何の難もなく藝州へ歸りける一説に此時京都より千里の濱とて院の福王寺に納めしといへどもかの寺の記に此石を寺に納しははるかにさき崇光昔海賊のありしといふは源氏物語の玉葛の巻よ海賊の事を書きけるも此日比の海にての事や其ほか伶人茂光か相撲の使にて西國へ下りし時ひかたの禪師といふ海賊に逢ひし時筆篋の小調子をふきければ海賊此聲に感して茂光にかつけ物ともして退き又門部の府生といふものはよもき矢にて海賊の眼を射てえりそけしといふ古物語ともみな此海上の事也此世のとあらねは是等の事は爰にまゐるさす

○宇喜多八郎直家生立浦上宗景へ仕る事

宇喜多奥家は父の仇をうつべき志もなく流浪して其子八郎と共に備後國鞆に隠れ住せしか後には福岡の富家に阿部善定といふ者あり宇喜多の家臣の縁者なりけるゆかりにて其家へ行て父子とも養はれてかくれし又其家の娘を奥家の妾と



して二人の男子をまうけ後、忠家春家といふ直家の弟は是也天文五年に奥家も此家にて病死あり福岡の寺に葬り法名露月光珍といふ其後は八郎をは母の養育にあひ笠加村に叔母の尼ありし所に行て年月を送て十歳をも越えたり其かるに此八郎七八歳の頃までは人並の生立に越て賢かりしか十をも越ては父の奥家おもれとりて鈍くなりて其邊の民家おても指さし笑ふこと多し母是をつくく見て兄弟の尼の物語して何ぞ八郎を守り立て再び浦上家へ奉公させ宇喜多家を起さんと思ふも甲斐なく愚よして用よ立つべくもあらずと涙をなぐし悲みて兄弟ともに力をうしなひてありしか人もなき時八郎母のもとにちかく寄りて小聲よていひけるは某近年うつけに成候事は實にあらず必氣遣し給ふな其故は心に一大事を思ひ立候は何ぞ命を全くして人となり浦上家へ仕へて終に祖父の誓を報し奉らんと思ひ候されども某かしこしと見は敵の貫阿彌よも生けては置候まじ父の奥家も愚にましませはこそ其難もまぬかれ給へ某それを思ふ故に作りうつけになり候必うれひ給はす時節を窺ひ宗景公へ奉公の事を願ひ給へと語りければ母大に驚き扱はふかき思慮ありての事とひそかに悦事かきりなし其母是よりさき天神山の内室につかへてありし故八郎奉公の事を宗景へ願ひければ天文十二年

八月に八郎を呼出し側近く仕へける其とし赤松晴政兵を出して播州おありし宗景の取出の城二三ヶ所攻破りければ宗景是を聞て天神山を發して百々田豊前日笠源太等を先手として播州へ打越え所々放火し赤松の壘ども二ヶ所屠て歸陣ありける此時宇喜多八郎十五才にて初陣なりしか兜首一ツ打取實檢備へければ宗景是を賞しける其後も軍功どもありければ明くる天文十三年八郎元服して宇喜多三郎左衛門直家と名乗て邑久郡乙子村の邊にて三百貫の地を宛行はる是其身の武勇と又能家の舊功あるを以てなり其頃兒島郡は四國の細川家に属し上道郡は松田小従ひて是等より乙子の邊に人數を出し又犬島邊の海賊までも陸よ上りて民家を乱妨しなやますも宗景より乙子村の山よどり手を築て是をふせかんとす然るも乙子村の地放地には隣にて味方地は遠き所故拘かたく思ひて宗景の足輕大將等たれ行て守るべきといふものなし其時三郎左衛門進み出て某未だ若輩なれども乙子村の邊にて采邑を給はれば幸に便あり此城を某に守らしめ給へと望む宗景是を老臣に議せらるゝも皆可然といひければ足輕三十人を添て三郎左衛門に乙子城を守らしむ此時直家十六七歳の時なるへし其大膽是にて思ふへし誠に其後は敵乙子の邊へ出るといへども甲斐々々しく防禦して敢て手さす



事なく後には却て此方より兵を敵地へ出して所々侵奪せしかは宗景是を賞美して猶地をまして三千石を領して城を堅固に守れりされども直家此乙子在城の時領知は少くして兵卒は多かりし故兵糧甚乏しくて戸川平介長船又三郎岡平内等をはじめ自ら耕作をなし又時々は近郷へ出て夜盗辻切などして兵糧をつゞけしされども不足すれば直家をはしめ家臣ども一等又一ヶ月五度三度はかり失食といふ事をして一日食を絶て其米を集め城に納置て出陣の時の兵糧とす甚艱難なる事如此なれども士卒よく思ひつゞきて軍功を勵しける其後天文廿年上道郡沼村の龜山城主中山備中一女子ありしを宗景の下知よて宇喜多直家お妻おはせて備中が智とす一説に中山備中此時までは藤井村のもん山の城にありしともいふ

### 富川平助宇喜多直家に仕る事

宇喜多直家の第一の老臣富川平右衛門秀安といふは此時平介といひて若年より直家よ仕へし人也其父は備後國門田村に門田を氏としたる浪士なり天文七年に平介出生しほぞなく父は卒しぬ又女子も一人あり其母此の二子を養育してありしか其所よ住かたき事起りて爲方なく二人の子をつれて其母門田村を出て備中の内迄行き母つくづく思ひけるは此平介を取立て人となさんと思ふに此女子

をも養育しては叶かたかるへしと覺悟して池の有けるに此二才の女子の袖に小石を多く入て其池にまづめけりさて平介を抱て美作に姉の有けるもとへ漸く日を経て尋ね行きぬ其姉の夫をば富川禪門某と言て名有る者なる故此禪門を頼て此平介を預置て吾身は備前へ立越え奉公をなすへしさて落付候は、又平介をも呼取に參るへしと懇に頼て母は備前へ出て行きぬかくて平介を禪門養ひ置けるに其生立尋常の子にあらねは我が爲にも可成と思ひ禪門子分にして富川平介と名乗らせて養育しける母も是を聞き悦て備前にて奉公を望みけるに宇喜多直の家弟忠家の乳にそわりつゞける其翌年作州の兵乱に富川禪門害せられ其婦も死す其時此平介をば歸依の僧のありけるにたのみてかくし置もらいて以後其遺言ともくはしく傳へて備前の母に平介を渡しける其頃直家并ぶ弟の忠家奉家ともに乙子城にありし時にて平介を其母か部やよて養ひ置て成人し直に直家に奉公したり平介は直家に五六の年れどりなりけるとそ按に直家は享祿二年出生也平介は天文七年に生る九の年れどりなる此平介母すぐれて才發なる女ゆゑ直家の家内のまかなひ物の出し入まて獨して勤ける其後直家のはからひにて家臣岡惣兵衛が妻お遣しける其惣兵衛子此腹にも餘多出來たり平介をも惣兵衛子分あして養育きたれども是は其儘富川平



介と名乗後み富川平右衛門秀安と改む其惣兵衛妻は孫の戸川肥後守達安備中庭  
願に有し時迄長命にて慶長八年九十二歳にて卒し法名を妙珠といひしとなり

雲州の尼子作州へ出張の事

攝津守

天文十三年十一月浦上宗景に従ひける作州英田郡妙見村三星城主後藤左衛門勝  
元より天神山城へ注進して尼子國久出雲國より兵を出し近日作劔へ發向の聞え  
あり急ぎ御加勢を越さるへしと有れば天神山に兵を集めて作州へ軍を出すへき  
用意頻なる處に又播州へ入置たる恐の者立歸りていひけるは當城よりやがて作  
州へ出陣あるよし小塩へ聞え其留主をうかゞひ赤松晴政自らうち向ひ天神山を  
乗取へき謀のよし風聞に候と告げ來る宗景是を聞て作州へ後詰する事も叶はず  
猶人數を集めて播州を禦ぐへしとて先百々田豊前に足輕を添て三石城を守らし  
む其隙に尼子國久作州へ出張し高田篠吹伊王山の三城を攻落し五百余人を切捨  
思ふまゝに横行し宗景に従ひし侍小瀬今村竹内江原大河原草刈市玉串芦田牧三  
浦福田等に降参させ雲州へ引取ける三星の城の後藤のみはよく防戦して終に尼  
子に降らすしてありける播州の方は三石等に加勢をこめて守らせける故赤松勢  
は出さりけり

直家砥石城を攻并落城の事

天文十四年邑久郡砥石の城主浮田大和備中方へ内通の聞えありし故宗景是を穿  
鑿あるお實正なれば乙子の宇喜多三郎左衛門直家に下知して浮田大和を討たし  
む直家勢を乙子より出し天神山よりの加勢をわはせて砥石の城を攻けるに利あ  
らすして乙子城へ引返す其翌日却て大和乙子城へ人數を出して是を攻んとす直  
家足輕を出して是をふせぐ大和利あらずして引退く其時二手にわかれて一手は  
金岡村へ引取一手は北地村へ引取乙子より池田太郎三郎出て追討す大和か兒小  
姓に馬場岩法師といふ者殿して退けるが北地村の荷蓋島といふ所にて池田と槍  
を合て暫し戦ひしが何れへも勝負付して互に引返す其間に大和か兵卒みな砥石  
へ引取て岩法師一人諸勢に後れて引退く今日岩法師が働きたどなにもはるか勝  
れかどく大和大に賞美して則元服させ馬場次郎四郎職家と名乗らせける又一  
日直家乙子より兵を出して砥石城を攻む近藤常左衛門星賀十郎花房亦七郎後号道悦  
城戸近く攻よする大和士卒を下知して是を防く馬場次郎四郎白團の腰指して一  
の城戸を防く近藤は馬場に詞をかけて白團の腰指は誰ぞ今此城を乗るがはやこ  
ゝを引くか引かぬかと呼はる馬場答て軍の場に出る者に其方は引くか引かぬか



といふとやあると詞せり合して攻戦ふ其時花房又七中指を番て次郎四郎を射る其矢二郎四郎か楯を持たる指を射割る星賀十郎も矢繼はやに楯を二矢まで射付る其矢みな元矧まで射込むされども次郎四郎か身には當らす次郎四郎こらへす楯はかたはらに投捨て切てか、れは是につゝきて城兵五十余人直家の兵に切てかゝる直家の先陣是に切崩され引色に見ゆる所を大和再拜打振て兵を進めて寄手を追うつされども直家乱れたる兵を引まよめて晩景み及て乙子城へ兵を入る其後乙子と砥石と足輕を出して絶す追合有けるに天文十八年の春宇喜多直家天神山の勢と謀し合せて両方より人数を出し砥石の城を夜討ます大和ふ意を討れて忽城を乗とられ備中をさして落行けるを追かけ多く追打し首をとりて引取ける此時大和を討取ける者はなかりしかども後に聞けは大和も其時討死せしとは聞えし砥石城を攻落しけるよし天神山へ注進ありしかは此城は島村貫阿彌か居城高取山のならびなれば島村是を預り守る直家には今度の賞として奈良郡の地を加恩あり奈良郡の城を預けられければ直家此城にうつり乙子城には弟七郎兵衛忠家に岡平内を添て守らせらる奈良郡城といふは上道郡播原村の西南今は新庄山の城といふ是なりといへり

馬場次郎四郎宇喜多直家に仕る事

馬場二郎四郎職家若年なから武勇名高く直家も敵なからも振群なる勳を見及はれければ大和滅亡の後便を求め呼寄て直家は扶持し寄力三十人預けらる其時次郎四郎十八才なりし是より前浮田大和砥石にありし時天文十七年九月に備中勢を謀し合せ赤坂郡鳥取庄高月城を攻ける高月城は高屋村の城より伏勢を置て合戦の半に寄手の後より突てかゝる大和次男片岡次郎左衛門此伏兵を防て力戦す馬場二郎四郎も此手にありて戦しか膝口を篋深に射られて二三町程引退其時養泉坊といふ山伏來て其矢を後より抜て捨ければ彌歩行叶はず其時大和乗替の馬に乗りて又二町程退き山の側に休息して有しお城兵又八十人計大和が旗本を目にかけ大和を討取らんと突てか、れは忽に突立られて引退く惣勢も氣を失てども崩れたちけるを城中の兵伏兵も一ツにあはせて北るを追事甚急なり次郎四郎是をみて先に討死すへきものをこゝ迄遁れ退き雜人の手よかゝらん事是非もなしと獨り怒りて居たりし處へ傍輩の片山彦三郎次郎四郎か弟の彦六郎といふ者引返し我馬に次郎四郎をかき乗せて退かしむ片山は追來る敵と渡り合ふ其隙又次郎四郎二町計乗抜けれども猶敵したひて十文字の槍を打かけ引落さんとせしを二郎四郎其槍を打はらひ切折て引取る彦六郎もよく殿しければ高



月の敵も引取ける故二人ども何の難もなく砥石の城へ歸りける若年よりかやうの手強き勤ともせしもの也此馬場か先祖は世々備前國の地士にて豊原庄に住す其前は陸奥國の住人栗屋川二郎貞任の後胤なりしか備前國邑久郡へ流浪し來て安部某といひて有けり其後此邑久郡後白川院の御領になりし時馬場某といふもの郡司となり豊原郷に來り住す此馬場に一女子あり是をかの安部氏か妻として一男子を生す馬場郡司か外孫なる故に是を養子とす是も又郡司をつとめて馬場伊賀守綱職といふ其子を馬場新左衛門といふ是は京都に誥居て卒す其時亂世故にや其子所領をもち傳へす此次郎四郎職家は新左衛門か孫なり天文十三年十三才の時より浮田大和に仕へ砥石城にあり後直家に仕へ年を追て勇名あり

按ふ安部姓は其先神武天皇大和國にて長髓彦を御征伐なされ候時長髓彦か兄安日命アヒノミコトをば奥州卒度濱に流さる其子孫津輕を領す齊明天皇の御宇に安部比羅夫に屬して蝦夷を征する先鋒となりて功ありし故是を奏し勅勘を免され又比羅夫の姓をうけて安部と稱す貞任宗任則安日命の子孫なりといへは此馬場か家たはくひなき舊き家也

飽浦加地を討并加地兒島を退く事

兒島郡に飽浦と言ひ加地といふ地侍あり是はとも佐々木の余流にて昔元暦に佐々木三郎盛綱藤戸の海を渡しける先陣の賞に兒島の地を給りしより其子孫爰に來り住して元弘建武の頃飽浦三郎左衛門尉信胤加地源太左衛門加地筑前守貞治の勅撰の哥人加地備前守時秀など聞しか末流なりしか天文廿二年の冬飽浦加地兩家兒島にて争論の事出來て合戦及ぶ終に加地戰ひ負けて舟に取乗り京都へ走り飽浦獨其跡を治てありしが後は宗景に屬し又宇喜多に仕へて飽浦美作と言て四千石余の地を領してありしか其後いかになりし

一説は飽浦打負て上京し佐々木義實を頼みて近江國へ行しといふされども此後宗景天神山没落の時飽浦美濃といふ者を頼みてまはらく兒島まかくれしといふことも有又飽浦美作か秀家に仕へしともあれは此説はとり難し此一説は武鑑に見へしとや此傳偽書なりといへは飽浦うちまけしといふは誤なるへし

浦上宗景と尼子と作州合戦の事

天文廿二年三月中旬雲州の尼子修理太夫晴久近國の兵を集め二万八千の勢を以作州へ發向す作州の國人共大軍に恐れて降參する者も多かりける此よし天神山に聞へければ浦上美作守宗景備前美作の兵を集めて天神山を出軍す其勢一万五



千高田表に陣をどり又其邊の城々に兵を加へて守らせしはらく對陣し互に足輕を懸て迫合數度に及びけるかくて五月十二日尼子の陣より眞木隱岐守同嫡男上野介高田彈正忠淺山櫻井牛尾多胡等三千余騎高山の郷中に打て出敵か、れどそ招きける浦上の先陣是を見て作州士後藤左衛門勝元片山奎助久義芦田左近將監三浦元兼か一族福田玄蕃勝昌同助四郎盛昌市又二郎玉串監物三星由井鈴木己下二千余騎渡り合攻戦けるか己に浦上勢引色に見えければ播州侍宇野刑部入道魚住某等七百余騎横合にかゝりて出雲勢を突崩す二陣にひかへたる出雲勢卯山飛彈守河副美作守森脇治部大輔三澤三郎左衛門黒正里田正田等二千七百余騎崩るゝ味方を右に見て備をす、め打てかゝる宗景是をみて敵荒手にてかゝれば味方敗北すへし後陣入替りて助よと下知すれば浦上四郎五郎周景同權八郎沼本新兵衛同八郎兒嶋入道佐用竹内栗原等千四五百騎先手を助けて戦ふ互に懸つかゝりつ入亂れて戦へども勝負もなく日もくれに及へは相引に引取て又對陣してありけるか同廿二日眞木隱岐守同上野介同宗右衛門其外一族郎等五百余騎先に進み高田淺山櫻井牛尾等一千余騎二陣に備て宗景の先陣に討てかゝる浦上勢に小寺美濃守黒田眞壁等三千余騎備を進めて攻戦ふ眞木か一族等先日もかひく、敷戦

もせさりしを耻て此度は勇をはけまし戦ひける故小寺等一戦にかけ立られて散々になりて引退三浦三星佐用上月等の作州士二千余騎皆きたなくも引ものかなど入替りて備をす、むれば出雲勢も牛尾川副一千余騎よて先陣にかゝり吉田筑後守同左京亮五百余騎にて二のめを誥て進めは播州勢是をみて鹿子魚住梶原志方の者共五千計にて関を作りて兵をす、ひ出雲勢より又尼子肥伊守嫡子同式部大輔二男左衛門太夫三澤三刀屋卯山立木湯本庄赤穴杉原等壹万計打てかゝりて大軍入亂辰の刻より未の刻迄戦しか多勢に無勢叶はすして備前勢打負け前後一ツになりて引退くされども浦上宗景の旗本五千余騎は備を乱さず是を見て扣てありしに浦上の一族に賢能齊と言古入道か宗景をいさめて今御旗本を以助け給へ亂れたる敵軍なれば極めて打勝給ふへしとす、めけれども宗景いやとよ吾旗本を以敵の亂れて追討をするを討は必定是を打崩すへけれ共又我旗本の戦ひ亂れたる所を見て尼子晴久の旗本を以て討んは必定也其時に誰ありて吾をは助けんさらは其時味方惣敗軍になりて生殘るものは希なるへし旗本を堅固に備てあれは假令先手はみな打負るども惣崩あはなるまじと辭りかへりて備けり尼子方にも是を察しけるか晴久の旗本を以宗景を討べくともせず備を不亂して浦上



の敗軍をさのみも追す引取て備をなし浦上方にも崩れたる人数をまどめ備へける其日尼子方へ討取頭數七百五十余級浦上方へも三百三十余級の頭を打取けるとぞ聞えへけるかくて浦上宗景は今度味方を多く討れ手負數しらす又作州の城とも尼子に政どられて耻辱とは思へとも又戦とも勝利あるべからずと思ひ敵人数を引取らば又城々をは取かへすへしと思案して境目の城とも人数をこめ堅固に守らせ人数を引て天神山へを歸陣ある尼子は爰より播州まで押入敵城十七ヶ所攻落し番勢ともこめて雲州へ歸陣す其後又天神山より作州へ兵を出して攻とられし城ともとりかへして番兵も置ける宗景雲州勢よりは打負たれとも是は國を隔たる敵なれば戦をなす事も希也近き敵の播州小埴の赤松晴政は勢ひ衰へ宗景の兄の政宗は室津お塾居して家臣みな宗景にしたかひたれば畏る、事もなく松田西備前を治めて尼子家に属して居れとも次第に勢ひ衰へて備前國中大座は宗景にしたかひ敵する者すくなし

備前軍記卷第二終

備前軍記卷第三

中山備中島村貫阿彌を宇喜多討取事

邑久郡砥石城主島村貫阿彌上道郡沼村龜山城主中山備中山城敵に内通して宗景をそむく聞えわれは宗景是を討へき内心なれとも所々の合戦隙なくて延引われは色にも出さずしてやうやく永祿二年の春に至り宇喜多直家申けるは島村相反き候由則自筆の文をも取出し慥なる證據をも取て告げれば宗景も兼て聞し事なりとて始て此事を謀りていかゞして可討とわれは直家答て貫阿彌か事は某か祖父の讐ふて候へは被仰付候へ早速討取可申と望む其時宗景の曰夫は望にまかすへし又汝が舅中山備中も謀反の聞えあるは知たるやとわれは直家答て是も其沙汰承及たり舅なれども君の御爲候へは是又御下知に候はゞ討て參らすへしどうけかふ宗景其忠義を甚感賞ありて中山島村誅爵の事汝一人にまかす間諜なく謀をめぐらし人数をも出さず外の騒もならぬやうによくはからへとて歸しける直家奈良部の城へ歸りて工夫をめぐらし舅中山の方へ一入ひたしく懇にして龜山の城の沼より東茶園畑といふ所に小さき茶亭を作り直家殺生野廻りの時此亭よ



休らひ中山をも此所へ呼て殺生の鳥をこゝにて料理しふる廻ける度々如此あれは備中此沼を廻りて遠く至るを愁て沼城より此茶亭へ假り橋をかけんといふ直家悦てはしをかけたなり其後は猶たび々彼亭へ往て酒宴及ふ直家謀ますしぬと思ひ宗景へひそかに告て最早近日は備中を討取ぬべく覺え候左もあらは烽火を揚て相圖をなすへし其時貫阿彌方へ御使にて中山備中謀反有之に付某よ被仰付御成敗ありし貫阿彌いそぎ沼に參て某と謀りて城を堅固に取固むべしと御下知あらは沼へ來へし其時島村をも討取可申と密々に注進せしかは宗景人を福岡の邊お置て烽火を守らせける二月の事なりしに毎の如く沼村邊おて直家殺生して暮に及てかの茶亭に行其夜は又直に沼城へ入酒宴をなす深更に及へは備中も興に乗して今夜は夜も更候間是に御逗留あれと言しを直家幸のとゝ思ひさあらはこゝに逗留仕へし家來は返すへしとて供に來りし者をよび今夜は爰に一宿すへし皆歸へしと下知す城中にも番の侍どもみな休足させ女童二三人酌にありし計にてうちどけ物語して猶夜も更て御休候へどあれは備中寢所へ入んとする取を直家刀を取廻す跡に見せて拔打に備中を切る切られなから脇さしを抜んとせしを組伏せ首を取り式臺へ出戸をひらき内をも内より明て直家の家來を呼

ふかねてはかりし事なれば城下にまのひ所々にかくれし直家の侍かけ込切り廻る城中の家來は思ひよらぬ事誰を敵とも知されは十方よくれて迷惑ふを此彼處おて切殺し即時に城を乗取ければ則相圖の烽火を立つ宗景も福岡へ出し置ける人は是を見て兼てまめし置しとどく島村が砥石の城へ使至て早く沼城へ到り直家に力を合すべきよしの書状を出しければ貫阿彌如斯の謀ありとはしらす有合の士七八人を連て沼城へ馳來り見ればはや城門もさしかため静りてあれは島村城中へ案内して門をひらかせ本丸へ入直家は兼てはかり置たる事なれば貫阿彌を即時に斬殺し供の郎等も夫々に手當あれは残らず殺けり又跡より來る島村か家來どもは道々に伏を置て打捕りさて沼城には直家の臣少々残して守らせ自分には直に砥石城へ取かけ攻けるお城中の兵は悉く沼城へ馳行て残るものは下部ども計なれば手にたつ者もなくたち所々城を乗取て是も直家の臣を置て守らせける是等のこと悉く天神山へ注進あれは宗景大に賞美ありて沼城をすくに直家お給ひ中山島村か所領をも過半與へられければやかて沼の城へうつり奈良部乙子の城をは家臣をして守らしむ直家は祖父の替貫阿彌を討又天神山より采地をまして給ひ城をも多くとり敷て其勢ひならふものもなかりけり此後は天神山の下



知をもうけず自のはからひにて兵を出し所々を取敷て直家の臣を分けて入置守らする取出せも多し

### 稯所元常を討取并龍口城落す事

上道郡龍口の城には稯所治部元常ありて松田に属せしかば是を討取らんとて沼の城より浮田七郎兵衛忠家を大將として長船又三郎延原等を出して是を攻んとす稯所治部此元常は文明中福岡合戦の時赤松に風城を出て竹田河原の北に備て戦ふ宇喜多の先手長船延原追崩されて敗走す治部直に忠家か旗本に討てかゝり是をも追崩すへしと備みたる、所を先手の長船延原はやく取て返して元常か勝はこりたる備へ横を入突てかゝれば治部是より切立られ敗北して段の原をさして引退く宇喜多勢も其道の狭ければ長くは追す備をまどめ引取んとする所へ赤坂郡和田の城主和田伊織行年十九歳容貌美にして心も剛なりしが兼て元常と男色の親しみわれは此合戦を聞五十騎計にて龍口をすくはんとて出けるかはや軍はてける所へ進み來て河原に旗を立て討てかゝるされども浮田忠家の旗本も先手も備をまどめてひかへたれば強くも戦はず又日も暮に及ければ互に備を入れて己か城々へ備へける其後も小迫合ども有けれども人數を多く出して合戦するに不

及其上此龍口の城といふは北西は險崖にして屏風を立たたるかとく山下に大河めぐりなかれ南は谷ふかく東計脇田の山あつゝきて甚堅固なる城なれば力攻にまたりども兵士の損する計にて攻取とはかたければ謀を以攻取んにはまかじと長船又三郎諫て直家へ申けるは御普代の子共の容貌もよく又心さしもすくやか成ものを撰ひ給ひて敵の城中へ入て討給ふ事まかるへし治部は武器よければも男色にふける者なれば如斯あらは十にして七八ッは討取事あるべしと言て岡清三郎か直家の傍ら居たりしを見やりて申ければ直家も心得うちうなづきて答にも不及座を立られける夫より一二月も立て岡清三郎事不義の密契有其艶書はどりたれども其相手は誰どもまらず拷問して聞極め成敗せんと捕て押こまれぬ此事誰ぞりたる事もあらねは清三郎更にかゝる事有べからすと家老どもさまゝいひて直家の心をなためけれども更に聞入れず奥に入ぬ又三郎より外の家老此密計を實に知らざるか知たるか皆眉をひそめて退たるに岡平内に來れど有てものかけにてさゝやきて直家申されけるは汝清三郎をひそかに圍をぬけさせこゝを落て何とぞ龍口の城へ入しめよ謀は清三郎に此間よくいひ聞せ置たりとわれは平内畏てひそかに清三郎が圍を出して落しける其明る日清三郎を城外へ出し



て誅せよとて半を明れば清三郎見えす番の者あきれてかくと申ければ直家大に怒りて即時に其半番をは成敗ありける扱平内は盗み出せし清三郎を龍口の城の川向牧石原平内が遠き緑りの僧の草庵を結て住ける者ありければ是を幸と頼みて其庵に隠し置て便宜を求て龍口へ奉公せんとを伺ひける或時治部城下の川に網をひかせて是を見てありしを能時節と清三郎其川岸近き藪陰にて尺八を吹てまはし歩みける治部も又常尺八を好みければ是を聞て人を遣し見せけるに其人歸りて申けるは年のほど十五六れ美少人の尺八をふくにて候とあれば治部さらは行て見んとて己か劔術の師加藤十歳小兒性早川左門水野織之介かれこれ六七人小舟を川向の岸よつて其藪かけに行て見れば清三郎其儘尺八を吹居たり白き帷子に刀脇指をさし其容顔美麗いはんかたなし皆々驚き殊お治部は男色を好めは此の清三郎が傍に歩みよりける清三郎驚たる振にてかの草庵へ歸り入らんとするを治部詞をかけてひきとめ御邊はいかなる人ぞかゝる方に有べき方とも思はれずそのみならず尺八のまらへ耳を驚しぬ某は龍口の城主也といへは清三郎驚き手をつき治部公にてましますにや某は宇喜多直家に此頃まで仕へたりし岡清三郎と申者なるか奸曲の者にさへへられて無實の罪をうけ己に

成敗に逢ぬべきを家老共不便を加へひそかに落し候てあやふき命は助り候へどもよる方なくやうく此草庵に身をかくし置候て近き中遠き國へも参べく候てなき跡をたのみ奉るどうちまはれて涙くみたるさまいとあはれなり治部男色を好むらへ清三郎かさまの哀なれば爰は捨置てはいかなる難にか逢へき又此美童を人にまかせんもいと残多しかた城あつれかへらんとれもひきはめて供にありし加藤十歳をかたへおまねきてかくやんことなき少人こゝに捨置なんもいと残多くもまた不便にもあれば城につれ歸らん敵中よりも参りしものといへと野心などあるへき程の年もあらずと言へは十歳答て敵中のものに候へは幼年たりともいか御了簡あれかしと諫れども更に聞いれずし野心有やうもあらは其時手も懸て成敗せんに何のかたき事あるへし殊にかれにつきて敵中へ謀をなす媒どもなりなんなと非を理にまけていへは十歳も力及はすさて治部近く立寄清三郎もみつからいひしは其身の難をかくまふへし我に従て城中へ来るへしとありければ御情のはと身に余り辱く覺え候へはいかていなとは申奉らん仰にまたぐひ参らせんまかし一まづ庵主へも其よし語り聞せ暇乞をもなし度候



と申せばまはしのこと何かくるしかるへきとて供ありし郎等一人さしそへて遣しやかて立歸りければ則引つれてはじめの船にともうち乗城に歸りて身ちかく愛せんと思へども敵中の者其少年の言葉計てはうたかはしく臣下も是をいさめければさすがに身近くもなさ、りしか沼の城下へ間者を入れて事の様を聞きしに清三郎か物語せしに少しも違もなかりければ今は疑もどけて身近く寵愛し水野早川兩人の愛もや、うどくなりて唯清三郎と酒をもりて酔臥ぬる事たび、なれば皆あやふき事に思ひて老臣ども是を諫め又加藤十藏を和田の城へやりて老臣伊織をたのみ異見を加ふといへども更に聞入す清三郎が心底を試みるお更に野心など有ものにはあらずと言はなちて是を愛しけるその上此事のはしめ沼城よて言語もならぬ程に老はれたる乞食を清三郎養ひて己か母と唱へ置てありしを沼城より盗み出し龍口の城に養ひ置清三郎母と稱して朝夕いと念頃おつかへけるたれか是を謀とは知るへし是等の事にて老臣等も疑を少し散しければ其後は強てもいさめされは彌治部は打どけて清三郎のみを相手として酒宴の際なし清三郎も情のあつきになれて心命をもなけうちつかへけるさまに見すれば治部かくこそあるへしと露心をく事もなく其外もこの奉公のやうを見て今は疑心も

何となく解て月日も経ければ今はみな心置さまもなきを清三郎見すまし永録四年六月中の頃暑さを避て城の北の流おのぞみたる涼み所にて河水を見えろし清三郎ととも尺八をふき敷盃をくみて沈酔し清三郎か膝を枕になし時をうづして眠りける其外はあたりにもなければ今ふそよき時節なりと思ひ治部が脇指側ありしを引よせて心もどをさし首打落し袴をぬきて首をつゝみ河の上にとばだちたる險阻のつゝら折を下りていつもつなき置てある治部が川遊ひする小舟の有を引よせ首を先投入つゝきて乗んとする所へ早川左門此音を聞つけて涼所へ行てみれば主人朱おなりて首なし是は清三郎が所爲なるへしと清三郎か殿を切たるど二三聲呼りすてゝ先追かけて出て見れば北の嶮岨を下るものかげ見えしをつゝきて追行其舟のきはにて追付き討てかゝるを清三郎ふりかへりて切付れば左門か鬘のはすれより左の肩先へ切さけたり清三郎が肩先を切さきはつれに切れれともうす手なれば二の太刀にて左門か肩間を切付た、み重て切捨ける左門は時に十五歳なりしとそ其首をはどらす清三郎はいそぎ件の舟に打乗掉さして川を下り打あかり逃行城兵ども舟を求めて跡を追へとも時ものひければ尋得すして清三郎は事故なく沼の城へを歸りける先清三郎は岡平内方へ行ければ



則是をつれて直家の前に出て治部か首を出しければ直家大きに驚き幼年にて此謀を仕負せんとかたきとなれば終には殺されやせましと不便に思ひけるによく討取たりと且歎且感して賞功淺からず其明の日則前髪をとらせて岡剛介とそ名乗らせける偕て龍口の城には老臣山口與市衆を集めて主人の生害今はくやむとも是非又不及此讐を報し吊ひをなさんとを衆議して論するに沼の城へ押よせ無二の一戦して討死せんといふ者も有り又和田の城主伊織を招きて大将として籠城せんといへど吾城を捨て龍口城に籠らんこともなりかたしといへばさらは此山口與一を大将として楯籠へしと衆議定て一先糧所が家臣立籠りける沼よりも此虚に乗して龍口の城を攻む今は主人なければ兵氣一ならずして防戦も叶はず又落行もの多ければ山口與一も籠城するに力なくされども老臣の身なれば士卒と共に落行ことも面目なく覺えてせん方なく三曲輪にて腹切て失ければ誰城を守るものなくちりくゝに落うせて宇喜多勢入かはり所々火を放ち一時あ焼はらひ直に和田の城をも攻取ければ和田伊織は城を落て金川の城へそ立退ける

一説には岡清三郎一旦龍口城の川向舟山城主須々木豊前に奉公して後糧所か

方へ行しとも其時いつはりて母とせし乞食女を牧石河原にて切殺獄門にかけられしともいふ又一説には治部を討しは岡本權之丞といふ又龍口の城主糧所治部を修理ともいふされども本文に記せる所實説なるがごとし岡剛介此後も武功をかさね大身となりて後には岡信濃といふ或曰糧所治部か小兒性早川左門龍口の城下北の川端にて清三郎に討れけるを其所ふ則葬り其塚今ありといふ尋べし

### 浦上政宗父子生害并清宗殺さるゝ事

浦上宗景の兄掃部助政宗は播州室の城より有けれども其性愚にありければ宗景にせばめられて居たりける其政宗の嫡子を小次郎といふ一に云與四郎云姫路の城主黒田官兵衛娘を此小次郎妻として永録七年正月十一日婚禮ありしに其夜のさはぎに小鹽の赤松晴政より忍ひを入れて政宗も小次郎も父子とも殺害さすれども小次郎弟三郎九郎清宗といふ者有ければ其臣江見河原源五郎等取立て室の城をとり治めける政宗の法名は實嚴祐真といふ其黒田の娘を弟の三郎九郎の妻として男子一人出生す是を久松といふまかる江見河原を天神山の宗景よりかたらひて三郎九郎を討取て出しなば所領を與ふへしとありければ是に組して永録十年五月



十八日月待の夜三郎九郎を弑して源五郎は天神山へぞ逃行ける源五郎が母をば室に残し置たりしを申さしにして殺されける其時の狂哥に源五郎かねて鼓の上手にてありければ

三柏子そろひておけりな江見河原主うち親うち鼓さへうつ

三郎九郎清宗法名 其子久松幼年にて室にも住がたくて小盃に行て居けるか九才江月恵観といふの時に宇喜多直家備前岡山へむかへどりけるこそ

○宇喜多と松田和睦并三村家親備前へ働く事

松田左近將監元成文明の始赤松をそむき西備前を治めしより後は代々浦上と合戦よ及び宇喜多と戦ふこと隙なくて尼子へ属して有しか近年尼子家衰へねれば松田も又勢を失ひけるを見て直家より和議の事を言やりければ則領掌して是よりは宗景の先鋒となり則松田當左近將監天神山へ出仕して直家の娘二人ありしを宗景の下知よて一人は此左近將監に嫁し一人をば作州三星城主後藤攝津守勝元妻となさしむ又備中國成羽城主三村紀伊守家親年來毛利元成の麾下よ有て伯芴不動が嶽或は法性寺の城にありて尼子と合戦ひまなし故お自國の迫合なかりければ松田等備中よ出て土地ををかす事多し今は尼子衰へて雲州富田一城よな

りければ三村もまばらく本國に歸り領分をも治め松田をも討ばよと毛利家に乞ければ元就聞て尤也望にまかすべしとて備中へ三村を歸されけるさて三村備中へ歸てきければ松田は宇喜多と和睦し浦上へ属して備中へ働らくへしと聞えければ先三村備前へ働出て岡山の城を攻め舟山の城を攻て金光與二郎須々木豊前等に降参させて備中へ歸りける

三村家親作州へ働并馬場高名の事

三村紀伊守永録八年五月には又作芴よ出陣して後藤攝津守勝元が三星の城を攻む勝元は天神山の麾下にて又直家の婿なれば加勢として直家より馬場次郎四郎に足輕をそへて遣す敵城を攻れば城中よりも兵を出して日々迫合あり五月廿四日二郎四郎愛宕精進の爲に城の前の川よ出て沐浴しけるに敵出づるを見て立歸り具足を着して出けるよ城兵一人先達て敵と槍を合す又外に敵二人弓にて槍脇を詰る次郎四郎是をみて其弓を持たる二人の敵へ突てかゝる余りに間の近ければ敵矢を放に不及刀を抜て切てかゝれば槍を以て次郎四郎是を強く突立れば不叶して逃て行又敵一人鎗を以てかゝれば是と槍を合せしか始槍を合たる敵味方も物わかれして次郎四郎が槍を合てある後より突てかゝる前後の敵を一方へ引



請んど少し退て二人と戦ふよきすき間をみて二本の槍を一所に手取にしてはな  
さぬ故二人ながら槍を突放て退くを追かけ行一人の敵跪き倒れければ直に押へふ  
せ首をとる其所へ敵二三人来て馬場夕兜を取て引倒さんとする所を切拂ひ又切  
てか、れは馬場か勇に恐れて近付くものなし其場ははや敵陣に近く又敵十四五  
人計槍にてひかへて見えまた續く味方の勢もなければ次郎四郎も引退く敵少々  
追來れども切拂々々て三星城へ歸りける其後も小迫合はありけれども強て合戦  
もなし或日狂哥を書て矢文を城中へ射る

井樓を上て攻るそ三星を天神そへて周匝くひ物  
城中より額出與二右衛門返哥を書て射かへす

天神の祈のつよき三星をなりはすまひそ家ちかに居れ

などいふ事ありて三村も強てもせめす備中へ歸りける馬場次郎四郎か此度の槍  
天神山へ聞えければ早々宗景より感状を出されける

今度於三星山下及合戦徑槍令紛骨之段無比類候恩賞必追而可相計候恐惶謹言

五月廿八日

宗景在判

馬場次郎四郎殿

三村再作州働き并家親うたる事

としも明け永録九年の春になりて重て三村家親作州へ働き出備前へも打入べき  
よし聞えければ宇喜多安からす思ひ何とそ謀を以三村を打取へしと工夫ありて  
津高郡加茂に居住せし浪人侍お遠藤又次郎同喜三郎といふ兄弟の者あり初めは  
成羽に久敷ありて家親をもよく見知家中も知音もあり又作州境に今居れば土  
地の案内もよく知たればよき間者と思ひて兄弟を呼寄て何とそ家親か陣所へ恐  
入て謀を以殺べきやうやあるとひそかに頼まれければ又次郎承り仰長り候され共  
一大事の御頼にて候はば三村は大名よて人数も多く候へは某が身よて打取んこ  
と甚かたき事に候され共某を御見立御頼被成候事生前の面目にて候へは身命を  
捨て謀をなし可申候されとも功をとけすして打とられ命をうしなひ候は、妻子  
をはよきに頼み奉るといひて請かひければ直家大に悦ひ功をとけば賞は望にま  
かすへしとありて遠藤兄弟作州へ立越て彼方此方と忍ひける三村家親此度は穂  
村の奥禪寺を本陣として其邊に皆々軍兵ども陣取ける常お其寺の便宜案内はよ  
く知りたれば敵陣の間を忍ひ入て兄弟申合鉄炮ふてねらひ搏殺さんどそ謀りけ  
る二月五日の夜の事なれば月も入り夜廻りの者に紛れて客殿の庭へ忍ひ入うか



へは本堂の方に家親が聲聞也れば縁へ上り唾にて障子の紙を濡し押破見れば家人を集めて家親は佛檀の前によりそひて軍評定をせしと聞ゆ又次郎かくし持たりし短き鉄炮も二ツ玉込たるよて是をうたんだかの障子の紙の破よりねらひけるよ火繩立消して玉出す則鉄炮を引その筒を縁の下へかくし置又夜廻りの番所へ行て篝火によりて寒き夜のうさなど物語まづかにして羽織のすそを火の中へ入る番人物焼臭しといふ喜三郎龜末にて某が羽織を焼たりとてみ消すふりにて其所をさりげなく立さり小陰めて其火を火繩よりつし付て又次郎に渡す又次郎是をとりて又もとの縁に上りてのそき見れば今度は家親はしめの佛檀もたれかゝり眠り居たるを幸とてねらひ澄し搦たれば胸を打貫きぬと見ゆ兄弟とも是をよく見極めて堂の後の簀に隠れて居たるに寺中大きに騒きけるか程なく静りぬさらは忍び出んとせしに最前の鉄炮縁の上に其儘置たり是を落し置なは以後に臆したりといはれんと思ひ再ひ立歸りみればもとの所に鉄炮の其まゝありけるを提げ簀をくゝりて忍び出て事故なく備前へかへり沼の城に至り其夜の次第を細々と話ければ直家大かたならず悦び猶其賢否を極めんため作効へ忍びをやりて聞しに家親死たるといふ沙汰もなく今日備前へ打入とてみな兵糧な

どつかひて軍立ある跡を聞て歸りければ直家も不審しけるか又聞えしは三村の軍勢途中より俄に備前へはむかはす備中へむけて歸陣したり是家臣三村孫兵衛諸軍をまづめん爲に家親の死去をかくして事靜に成羽へ軍を入けるにて有けり扱歸着て後家親の死去を披露ありければ家臣誠に暗夜に燈をうしなひしかとくあされてそ居たりける其後奥禪寺にて家親打殺されし事世にかくれなければ其賞として遠藤又次郎に千石の地をわて行はれけるそれより多く武功をかさねて浮田の号をゆるされ領知も加へられて後には浮田河内と名乗り四千五百石の地を領しける弟の喜三郎も同じく賞を行はれ是も後に遠藤修理といひける一説に家親を遠藤か鉄炮にて搦しは作州弓削寺といひ又佛經寺にての事ともいふ共に誤也久米郡穂村の奥禪寺に後迄佛檀の腰板に其鉄炮の玉ありしと見し人語りし

### 三村五郎兵衛紀伊守の弔合戦討死の事

かくて備中國成羽には三村紀伊守家親を葬り佛事となし忘中も過て老臣等打寄り弔合戦をせん事を論しけるに三村五郎兵衛進出て言けるは先君あへなく宇喜多が爲よ命を失給ふ事其憤骨髄も融て無念なれば弔合戦日を延かたし其上ね



めくとしてあらん事當家の耻辱申に不及一日も早く軍を出し先君の讎宇喜多を其首を手向奉らん外なしし運つきて戦負け討死せば先君の死も從へるなりと無二の覺悟に言出しければ三村孫兵衛親成答て五郎兵衛論する處一理あれども今此怒にまかせて戦は味方の兵を多く損して戦勝利あるへからす其上又敵に勝を付て後度の戦なるへからし暫く時を待元親實親家親の二男三男也の兩君を守り立て成長の上是を大將として一戦を遂んこそ全き忠義なるべしといひければ一族郎等時に當り打死せん命の惜さにや皆孫兵衛か旨も同意して此謀尤なりと是も決定しけるされども五郎兵衛は是も同心せず皆孫兵衛か遠き慮に同意して家中一統に存命して若君を守を立奉り忠義をなせば御跡危き事なし此五郎兵衛に於ては愚味よして命なからへたりとも君をたすけ奉る才力ある身あわらぬは吾一人は敵に向ひ弔合戦をなし討死して君恩も命を奉る外の存念なしとて其座を立てば其一族若黨五十余人ひしと出立其外家親に厚恩を蒙たる士六七輩是も同して皆一途に討死を定て禪院に不殘立いり松峰和尚といふ禪僧に末期の一喝をうけ面々法名を過去帳に記し焼香して直に出陣し永錄九年四月備前境より沼城の直家へ使を立て三村五郎兵衛今度主君三村家親の弔合戦も罷向たりと言送り上道

那へ打入ける其勢僅七八十にも不足勢を二手に分て一手は五郎兵衛將となりて釣の渡より南へ向ふ一手は矢津越より沼城へ押寄る直家は是を聞て七郎兵衛忠家戸川岡長船小原等に三千余人を添て三村勢に出向ふ宇喜多勢も三備も分て一手は南乃勢にむかひ一手は矢津越より來る敵に向ふ一手は遊軍となす是は此度の戦は最前の憤りをふかく思ひつめたる弔合戦なれば小勢ながらも必死の敵にて味方危き故此遊軍にて弱きを援んとて扣たるか五郎兵衛か備五十餘騎一手にして思ひ切たる事なれば弓鉄炮を射放と均しく突て懸る長船か備是をうけて暫く迫合た、かひしが長船切立らる二の目に備たる岡是をうけて渡り合ひ切結ふ是もわやうく見へければ七郎兵衛忠家横槍を入れて突崩す必死を極たる三村勢なれば引も退す三村五郎兵衛か郎等三田權兵衛山縣作助兒島十郎太郎枕をならへて討死す五郎兵衛も四方八方切て廻り終に其所にて討死す大將被討ければ此手は是にて散しける扱矢津へ向たる勢には戸川平右衛門馳せ向ふ是も同じく必死の兵なれば鋒先甚銳しく戸川勢打負引退く其時土田の上蟹の目といふ所に三村か侍五人槍先を揃へて突てかゝる馬場重助次郎四郎名を改爰にむかつて先弓を以て敵一人を射伏たり殘る兵と槍を合て突合けるか續く味方もなく戸川が備も



引取と見へければ突はらひくゝて山の腰を傳ひて退く所に味方一人敵と渡り合ふ手を負て既に討らるへく見へければ敵を突はらひ其の味方の手負を助けて引退く其時味方の備よりも取て返し來て切合たゝかふ敵必死に極めてつよしといへども小勢なれば終ふ味方は大勢に戦ひまけて三村勢悉く討死して果にけるされども五郎兵衛をはじめ七十余人命を君恩に報し名を千載に残しける宇喜多方にも小原藤内高月十郎太郎矢島源六宇佐美兵藏等四十七人討死し手負百余人に及ける今度は馬場重助へ直家より感状を出しける

去十日蟹目被及合戦於槍脇敵一人被射伏剉引退刻後陣輩合戦之跡被見掛被返候由志之程神妙候必可有褒美者也 狀如件

五月十五日

直家在判

馬場重助殿

○宇喜多と毛利家和睦の事

宇喜多直家永録九年迄は毛利元就にも尼子晴久にも敵して作劔鷹巢城を攻落させて花房助兵衛職之城主江見次郎を討取て歸りける又備中にては日幡八郎左衛門毛利勢の圍をうけて籠城しけるが沼城へ援兵を乞ければ又花房助兵衛に足輕

を添てさし遣し是を助て籠城し終に毛利勢を追退けぬまかるに此頃天神山の浦上宗景より毛利輝元へ使を立て近年家臣宇喜多直家逆威を振ひ候是を誅罰せんと存候援兵を頼入よしを申遣す又備中の三村家よりは父の家親を宇喜多と討れ此警を報せんと存候あはれ御加勢を被下候へ此恨を散せん爲ふ備前を切去たかへ國をは進上申べしと言やりける此事共直家傳へ聞て今毛利と中違して近國の敵に力を添られては叶はしと思ひ小早川隆景へ角南隼人入道如慶を使遣して安國寺を以深く頼み浦上三村を捨て加勢を某と給はり候は、備前半國をは可進と有ければ其節は元就は老衰して吉川元春小早川隆景はからひなれば兄弟雲州の陣所にて評議して上方へ手遣をなさんにはとく宇喜多直家に力を加へ備前を味方に属けて働んに利ありとて宇喜多と和をなして合力すへしとの答みて角南如慶歸りければ浦上三村とは毛利家手切に及ける宇喜多加武威いよく盛になりける

澤田村明禪寺城落城の事

三村家親殺されし後二男同修理亮元親三男孫二郎實親家親の弟同宮内少輔等相謀て備中の城々に兵を籠め備前よても岡山城主金光興次郎舟山城主須々木豊前



中島の城主中島大炊等を味方にして宇喜多勢を防ぎ守りければ直家も容易に備中へ人数を出す事もならず却而三村統備中國中の兵をかり集め大軍を以て備前へ働き出て宇喜多と合戦し親の仇を報せんと用意する事えさりなり宇喜多家に是を聞て沼城の防戦の爲に永録九年秋上道郡澤田村の明禪寺山に城を築て番勢を置けるに備中より兵を出し所々にて小攻合ありて明禪寺の城へ敵取かけ攻ける城中よりも兵を出して防ぎ戦ふ馬場重助山の麓より下りて防く其中に大溝あり重介飛越るとて向の岸をふみ崩し轉ふ所を敵鎧にて突く重助起きあがる勢に敵槍を突はづし行あまる重助即ち刀を抜て切伏たり其所へ敵又一人來りて重介を討てかゝる是をも打捕り首二ツ提て城に入て其日の迫合は果にけり明る永録十年春御野郡へ備中勢出張て風雨烈しき夜明禪寺の城へ夜打をかけ澤田村を焼て城へ攻入る城中も不意を討て大きに周章す此火の光に松明もたてず備中勢所々より攻入れれば前後も辨へず敵味方も分かねされは防かねて終に一の木戸を乗どられ多勢込入ぬれば城兵せんかたなく南の山越に中川へ出て漸々沼の城へ引取ける討る、者も五六十人に及ける其跡へは備中勢入替り根矢與七郎薬師寺彌七郎に人数百五十余人を添て明禪寺の城を守らせける

按するは澤田村妙禪寺山の城を近世に記せるものに皆妙善寺山と書く是は御野郡津嶋村の妙善寺あるに混して誤れるや寂室語祿に明禪寺にて作る所の詩一章あり文明中に注せる首書に明禪寺者備前國澤田村に在りと書たり則其寺の廢せし跡の山なるへし

明禪寺合戦備中勢敗軍の事

宇喜多直家より備中方へ属せし諸士へ賄し謀を廻して内通せしめことに岡山城主金光與次郎中島の中島大炊等は備中の味方は遠く沼城の直家は近き故内々宇喜多へ通じける又船山の須々木豊前も同意しければ明禪寺山の根矢薬師寺方へも沼より通して岡山中嶋舟山等も皆味方へ可参よしなり其城敵中に有て始終守りつめ難し降参あらは所知をわて行へし左なへは兵を出して其城乗崩へしと言やりければ根矢薬師寺評議して舟山岡山等の味方沼へ可参といふは直家の偽なるべし其上根矢薬師寺どもに妻子を備中へ置たれば宇喜多も通することなるべからじされども此城無勢なれば直家大軍にて攻んどき防禦の術なしがたし早く備中へ此由を告て援兵をうくへしと飛脚を立て加勢を乞ひ沼へは手切の返答に及ひける直家これに依て考るは明禪寺の城を攻めは備中勢必後誥あるへし左あ



らは敵を味方地へ引出して討んに利有へし幸の事と工夫ありて金光與二郎へ直家より頼にて近日明禪寺城を攻は其時三村後詰あるへし左あらは有無の一戦をして三村を討取べき間必備中勢後詰有べき様に誘出すへしと言やれば金光領掌して石川左衛門久智三村元親の姉婿也へ使を以て曰やりけるは近日直家出陣して明禪寺城を攻べき聞えあり其時早々御出陣ありて城中と牒し合て御討あらは御勝利疑あるへからし此事三村家へ示し合さるへしと言やりければ早速成羽へ注進あり又明禪寺の根矢薬師寺よりも飛脚にて言やること同じければ旁三村一族相談ありて直家は不與戴天讎なり此度直家明禪寺の城を攻こそ幸なれ天のあたふる所なれば大軍を以駈むかひ一舉に直家を討取其勢も浦上をも打亡し備前を皆取敷へし殊み此節毛利家出雲へ働いて留主なれば加勢の氣遣もなし能時節到來出陣を急べしと備中にて三村等勢をかり催しける惣大將は三村修理亮元親石川左衛門尉久知植木下総守秀長庄式部少輔元祐等其勢合て一萬余騎の着到を付てすてに備前へ發向す宇喜多直家は今日沼城を打立て五千余人を五段に備ふ本陣は古津の山はなに備惣勢は目黒村邊までと扣たり直家の先手を進めて明禪寺の城へ押寄先一戦して暫く息を繼たる所へ斥候者馳歸り後攻の備中勢三手に分れて押向

以候一手は富山の城の南に付て押出し一手は首村より上伊福村通り中道へ來り又一手は山より付津島御野村へ通り釣の渡りへかゝると見え候と告る直家は是を聞とひとしく兜の緒をしめ馬に打乗再拜打振て唯今明禪寺城を乗りとらすば三村が廣となるへし又今此城を攻屠り取てかへして備中勢を切崩さん事は甕上の塵を拂かとしはや攻落せものどもとて田島の中を一文字に乗切て明禪寺山の城下に付て大將かくのとくなれば諸勢蟻附して揉立ければ城中身命を捨て防けども寄手の勢ひに忽城を乗取れて櫓々に火を放ち寄手切て廻れば根矢も薬師寺も力盡て南の山傳ひに瓶井山へ引退引残りたるものどもは度を失て所々に迷惑ふを追詰追詰打殺す扱城中不殘燒あがれば後詰の備中勢はるかに城中の火の手を見て兼て牒し合て前後より可討といふ謀も相違して揉もんで馳來れども行程十餘町を隔たれば爲方なし直家は城を攻落し不殘燒いて其山上に旗本の備を立て靜りかへて相待けるかくて備中勢備前へ打入辛川表にて手配し先陣庄元祐七十餘人金先與次郎宗高を案内者として富山の南の野中を斜に押して春日社の前なる川瀬を越て瓶井山に側て明禪寺山の城へ入んとす中の手は石川左衛門尉久智五千余人上居福村の中道より岡山の城の北なる瀬を渡り原尾島村へ押出る是は明



禪寺城を攻る直家の後陣へ切かゝらんとす惣大將三村元親は中島大炊を案内者としど八千余人釣の渡を越て湯迫村より北の山へ側て四御神村を経て矢津越に沼城へ寄せて留主を乗取らんと謀る先陣まづ春日宮の前の川を越て三掉山をさして備を進むる所、明禪寺山の城兵をもの落來るものに行逢て是はいかにと言程もなく宇喜多の先手明石戸川長船浮田忠家等段々備を進め操かへく鉄炮を擲かけ三掉山の高みより鋒先を揃て突てかゝれば備中勢思の外、城を乗取れれくれ心の付たる所へ宇喜多勢は勝軍せし勢にて直に慕成て突かゝれば庄元祐の備忽打負て崩立引退を元祐再拜打振りきたなし者共爰を去て後日の耻辱遁へからじと兵をいさむれ共聞もいれず右往左往に引て行又ふみ留り戦て討るゝものも數をまらすされども元祐は家臣有岡某と二人旗本よ五十人計備へてありしか今は爲方なし是迄なり討死せんと延原土佐か備へ討てかゝり火を散して戦へは延原切立られ色めく所へ二陣につゝきたる浮田忠家横合ふ突てかゝる朱の四半に兒の字を書たる印なれば元祐是を見て是は直家の一族と見えたり進て打やものともと大聲に呼りて爰を最期と戦ふ浮田は又一人ももらさず討取れど下知すれば元祐の兵三十余人枕をならへて討れける元祐も手を負たるを家臣助けて

引取らんとする所を大將と見えければ能勢修理しさりばに追て徳興寺の東一町計にて元祐を打取ける大將討死すればまづ此下の手惣敗軍に分なりける隱徳記に後備中にて討死といへども是は誤なり此時此所にて備中の兵士討死夥し其骸を穴をほりうつめ塚をつさしといふ今は塚はなし玉峰院の門内ふ今大松あり則塚所のわりし中の手の石川左衛門尉久智は直家の明禪寺の城を攻め後を打んと原尾島の西迄進みたれどもはや城は落しと覺えて火の手揚りたれば案に相違して先備をこゝに踏どめ扣たる處に下へ廻りたる元祐が勢も大崩と見えて引退けは石川久智もあされて中島加賀といふ老功の侍をよびて兼ての謀人に違れば只今になり直家の備へかゝりて戦ども勝利あるべからず上の手の元親の備と一所になりて直家と一戦をなさんはいかふとあれば加賀答て仰御尤に候某が存る所は敵の近づかぬ間に川をあなたへ退き西の岸に備を立て直家川を渡してかゝらん所を半途を討給はんに利可有か其外はかくのどく謀相違しかる上はせんかたなしといふ又石川か老臣等敢て是に従はず面々に軍策を演ける間、浮田與太郎元家按よ此時與太郎は甚幼年なるへし浮田河本對馬花房助兵衛三手に備て石川氏別の別人を與太郎と記し誤しなるへし河本對馬花房助兵衛三手に備て石川か備へ近々と進みかゝる石川久智止む事を得ず原尾島村の中道に備を立待かけたり浮田先陣に進んで討てかゝり相戦ふ河本花房は左右より靜に備を進めて戦



ひなかばに両方々鎧を入れて突かゝれば石川勢駆立られ中島加賀をはじめとして多く討死して石川もあやふく見へけるを伊勢新左衛門石川を諫て竹田村の東迄引取らせ爰にて敗軍を集めて備ける浮田勢は逃る敵を八幡村の邊迄追行を石川やうやく備を立なをし浮田勢の乱て追を待うけ又引返し戦ければ浮田戦ひまけ討るゝものも多く已に危く見えけるかやうく小町村迄引退く石川勢も前の敗軍の跡なれば強ても追はず引取けるさて上の手の惣大將三村修理亮元親は今朝己刻釣の渡りを越ゆ若松田金川より舟にて下る事もあらんと須々木豊前をは其押のために舟山お殘し中島の中嶋大炊を案内者として土田矢津越をして沼城の宇喜多が留主へ切入て城を乗取らんと進み行けるが四御神村の邊を過る時明禪寺の城の火の手見えければはや落城せしと見る所に又南の二手段々敗軍せしと見ゆれば元親の備惣兵さわざ立て色めき後陣より引返す其上此方には所々小川多くて足場あしければさはぎて引取人馬溝川に落入者多くて彌みだれ崩れけるされども元親の旗本は備を亂さず後陣の乱るゝを見ながら沼へは越えす南へ向て備をすゝめ明禪寺の西の小丸山に直家の備しを見かけ是と一戦せんとれし向ふ直家も元親のかゝり來るを見て備を山よりれろし高屋村に備て明石飛彈岡剛介

を備前として待かけし所へ元親は親の誓のことなれば溝をも時をも構はず眞一文字にかゝり來り明石岡ヶ備へ命もれします切てかゝる其勢に明石も岡も切立てられて崩立三村爰をせんぞ、追つめて直お直家の旗本へ切かゝらんとする所へ最前に國富村にて備中勢下の手に切勝たる戸川長船浮田延原引取て後陣お扣たるお直家の先手切立らるゝを見て静々と備を進め元親の旗本へ横合より討てかゝる此勢に明石も岡も取て返して戦ひ直家の旗本も又すゝみて三方より三村の旗本を討ければ元親も狼狽し忽敗軍す元親怒て今は討死すべき時なりと馬引返し進む所を家人馬の口に取付て西に引向引退けは此手も又惣敗軍になりて竹田村の北まで引て行宇喜多勢追付して三村か兵を討取事敷をまらすされ共直家みつから長追を制し軍をまどめて引取ければ三村も石川も釣の渡りを越て漸備中へ引退ける此日備中上中下三ヶ所の手あて戦死せし兵士惣兵わけて記にいとまわらす是を永録十年の明禪寺崩といひて其頃にて備前の大合戦直家の代第一の勝軍なり

### 金光須々木中嶋等宇喜多へ降参の事

此度直家備中の大軍に打勝三村等敗軍ありければ兼て内通せし備中に随ひし西



備前の城主共皆々沼の城へ降りける先岡山の城主金光與次郎宗高則沼の城へ出仕して直家の麾下に属しければ岡山の城を其儘守らしむ船山城主須々木豊前は嫡子四郎兵衛を以て直家へ此たひの勝利の嘉儀を演て御味方に可参といひける直家は是を開豊前兼て味方へ内通せし者なれば今度備中勢の退口に追討して首の一ツにても持参すべきに元親か下知をうけて金川の押へをして今更降参表裏の侍なりされども降人を殺すべきもあらずとて戸川平右衛門に下知して須々木父子か領地を取あけられ豊前は隠居させ別髪して行迹を改め茶領をあたへ四郎兵衛は直家に仕へて所知少し賜ひて舟山釣の両城も破却させられける中島の中島大炊に三村が矢津へ向ふ案内者はまたれども敗軍の時引残りて石川が勢の退くを追討して首一ツ打取沼へ持参して降参すまかるに大炊か一族備中にありし中島新左衛門といふ者大炊か直家へ降り備中勢を追討せし事を悪みて中島に残り居て中島の城の邊に榎の大木ありし其うつらなる所に立隠れて大炊が沼より歸るを待居て何心なく歸る處を切殺して備中に歸りける此新左衛門をも後に又大炊といふ其切殺されし大炊か子源三郎と言て直家の臣となる今に其子孫中島村にありて其所に新左衛門か隠れし榎の古木も今にのこれり

一説に中島の中嶋大炊討れしは是より前永録四年龍口山落城の時和田の城をも中島の城をも宇喜多より攻落す其時城主大炊城を落て榎のうつらにかくれ居しをさかし出して討しども云又備中の中島新左衛門後又大炊といしは同名なれども是は本の稱号二階堂おて一族おてはなしといふ其頃當國の中島大炊備前國の中島大炊筑前國高橋知運か臣者中島左馬介か子に中島大炊とて西國に同名三人ありてまさらはしき事ありといふ

○ 宇喜多備中國へ働の事

直家は三村元親を戦勝て後毛利家へ使を立て彌御手に属すべしと言やる又三村は阿州の三好家を頼むよし聞へて毛利家とは彌手切になれば近々毛利家出軍あり三村を討へし直家にも備中へ發向われとの返答也直家大さよ悦び備中表へ人數を出し所々の城を攻らるまつ永録十年五月に撫川の郷内芝場の城を攻取へしとて戸川平右衛門一手を以攻けるが小城なれども地形堅固よて前よは川有り沼廻りて南よ庭瀬城あり北に日畑城あり皆敵地なれば押の兵を置いて芝場の城戸近く攻寄せ井樓を組上鉄炮を放ちかけ明日は乗取へしといふ所へ直家思慮あつて花房助兵衛を使として戸川にはやく引取よとの事也されども早攻落すべく見えし



程なれば助兵衛心得てはやく乗とれとの御使なりと言傳へて助兵衛一番に乗込戸川か兵續て攻入り城中の兵をこどく追ひ拂ひ火をかけて城を焼はらひてそ歸りける同き秋八月中旬備中國へ直家働き諸城を攻落せよと下知して浮田七郎兵衛を大將とし長船又右衛門沼本新右衛門明石飛彈角南隼人等九千余騎にて乱入す才田城主植木下總守秀長猿懸城主穂田實親三村元親等所々まで防戦ありけれども日外の負軍に勢ひを失ひければ忽浮田勢破られてみな己か居城に引入て楯籠る續て是を攻んとて先翌日才田の城を攻ければ城主下總守防かねて降人となる此城をは則下總守に宇喜多勢を加へて是を守らせ近郷を焼働しけるに人民恐怖して指さすものなく直家の麾下に属するもの多し

一説に庄式部少輔元祐此時討死といへども明禪寺崩の時備前國國富徳與寺にて討死せし事實説なり

宇喜多又尼子に組する事

去る永録九年雲州富田月山の城落て尼子家臣どもちり／＼あなりけるか家老山中鹿之介京都にて尼子家再興の事を謀りて尼子孫四郎勝久を大將として吉田三郎左衛門といふ者を中國へ差下し味方を催し備前作州兩國に到りて直家を頼み

かたらひ尼子に一味ありて國を興さは早速備中一國を切從へて宇喜多に渡すへしといふ山中幸盛か狀を出して子細を演説しければ直家これを聞家臣等に談して即一味の返答に及て毛利家に背きけれども先時節を窺ひ毛利家に敵する色をは出さで有しか明る永録十一年浦上宗景是を聞て毛利家へ使を立宇喜多直家尼子が舊臣山中鹿之介が催に應し候也表裏の直家これを誅し給は御先手仕候半と告やりて宗景毛利と和談し直家を討取べま謀りける

宇喜多松田を討金川落城の事

津高郡金川の城主松田左近將監去る永録五年に浦上宗景と和談し直家の聲となりて宇喜多ども親くなりたれども直家は猶ひまを窺ひ松田を討んとおもひけるよ松田近年日蓮宗を甚以て信向して吾領内の寺々を其宗に改させしたかはさる寺を焼はらひける金山觀音寺吉備津宮など放火せし此時なり又金川城中にも日蓮宗の道場を建立しければ家中の兵士も領内の百姓も左近將監をうとみ退去するものも多し直家は幸の時なりとはかりて討んと思へども老臣に横井土佐橋本某宇垣市郎兵衛其弟與右衛門などいふよきものありて家をどり治ける故亡しがたしこの横井土佐は醫術をよくして此藥をのめは病も則平癒するやうにいひふらしける其上正直



仁愛の生れつきあて敵といへとも薬をあたへ療治しける又宇垣兄弟も謀なごよ  
くせしものなりし直家ある時沼より金川に到りて鹿狩を所望して城主と共に狩  
をまける其時鹿をうつとてあやまりて宇垣與右衛門を討殺雖うちしともまれす  
實は直家の臣に搦せし事なりしとて其後兄の市郎兵衛も退去して松田が家治ら  
すさだちけるを幸と永録十一年七月直家より津高郡虎倉城主伊賀左衛門久隆是  
直家の同與二郎明石掃部か智なりを招ていひけるは松田左近將監われらに反心あると聞  
ぬよりて討果すべく思ふいか、謀べきとわれは其頃近隣迄もみな松田をうとみ  
て伊賀父子とも不和なりし故伊賀答て此節松田を討給はんことやすかるへし御  
先手仕へしと手にとる様お請合ける直家大きに悦びて其謀とも伊賀父子とよく  
示し合せて相圖を定め伊賀は虎倉へ歸りよけるさて七月五日約束の日限なれば  
直家百騎計の人数にて赤坂郡矢原村に至り陣を取伊賀はかねて忍を付置内通せ  
し事なれば五日の夜金川城内道林寺丸へ人数を忍ひて入れ時の聲を揚たり折ふ  
し左近將監は城外に出て留主なり家老横井又七郎取合せ手配し門々をさし堅む  
伊賀父子鉄炮を打かけて本丸を攻む左近將監は是を聞て急き馳歸り搦手より城に  
入る横井も人数を出して是を迎へ入てこゝを専と弓鉄炮にて是をふせぐ左近將

監楯に上りて伊賀に向て何の故を以てはからす城を攻るやとまはらく言葉戦す  
る所を伊賀が兵士ねらひすまして是を搦つ左近はこゝに討れにけり息孫次郎是  
おかはりて士卒を下知して防戦す松村修理も伊賀が兵を入たてじと戦て打死す  
直家の兵矢原より城中へ入伊賀が勢と一所お合せて本城の四面を取巻平攻に六  
日一日是を攻れとも堅固の地なれば容易に乗取がたくて夜に入ける城兵も寄手  
も討死する者多しされとも寄手は多勢になりて是を攻城は本城計なればとて  
守り詰かたく七日の曉孫次郎并次男左門潜に城を忍び出櫓村某といふものを  
れて備中へたちのく大將落ければ士卒も多く落行ける伊賀父子是を見てまきり  
又兵をすゝめて一二の城戸を攻破り本城へ切入は残り留りし松田か普代の郎等  
みな討死して城は落にけり松田兄弟は家人少々つれて西の方山傳ひに下田村ま  
て落行しか虎倉の城より伏兵を此邊も置ければ孫次郎を目にかけて切てかゝ  
る今はのかれぬ所とねもひ前後左右切まはり孫次郎は爰にて討れにけり次男左  
門盛明は雜人と共に紛れて漸々備中へ落行ける

○ 宗景勢と直家勢片上せり合の事

去年永録十一年より宗景は毛利家に属し宇喜多は尼子再興の合力せしかは天神



山と沼とはいよ／＼矛盾になり人数を出し足輕をかけて追合事たひ／＼なり今年永録十二年の春天神山より伊部に城を築て日笠源太を置て守らす沼より花房助兵衛を將として攻させて終に攻落し城主日笠をも討取て宇喜多より兵を入れて守らせける又片上の戸田松の城も天神山より浦上河内景行を置ければ此伊部の城と時々せり合わりける馬場重介此伊部ふ来り居しとき戸田松の兵と葛坂にてせり合わりて重介其外槍四五本にて敵を追て葛坂の下の堂まで追つ追れつ五六度もせり合て引取ける敵猶跡をまたふ重介等敵を追はらい追はらひて槍をさかさまよどり鋒先を跡にしてそ伊部の城へ引取ける

## 宇喜多直家備中齊田城後攻の事

宇喜多直家約を變し尼子家へ合力し毛利家に背ける事をにくみて永録十二年四月毛利六郎左衛門元清一万余の勢を卒して備中へ出陣し宇喜多方の城を攻むとす三村修理亮元親同弟上田實親等は幸と毛利家の先手に加りて先植木下總守秀長か籠たる齊田の城へ取かけて是をせめ植木孫左衛門福井孫六左衛門其外宇喜多よりの加勢の人数等かたく守りて防戦す尤此城堅固の地なれば寄手是を攻て命を殞すもの多くて俄には攻落されしとて元清下知して戦を止て遠攻にして

四面を遠く囲む城中糧乏しければ長籠城叶かたく覺て城よりひそかに峰本與一兵衛を出し備前へ遣し直家へ後詰を乞直家は是を聞此城捨置ては味方へ属したる諸方の城志を失ひ頼なく思ふべければ其事心得ぬ早速人数を出し後攻すへしと返答して峰本をは返し早々兵を準備其勢一万計引卒して沼城を打立齊田の此方一里計東に陣取て城を圍みし毛利勢の後へ人数をかけて戦ふ城中大きに力を得て切て出で前後より揉立戦ふされとも毛利の軍にも加勢として來りし熊谷信直桂元隆を兼而より後攻の押へ備置きこの前後の敵も手を分け戦て宇喜多勢百三十余入討取られければ直家も少し猶豫してかたく備て扣ける扱城中糧乏しければ何とそ兵糧を入んど手段をなしけれども難叶して日を経ける處に石川福井工藤等宇喜多に馳加りければ是に力を得て是を先手として又戦ふ花房助兵衛職之と穂田與四郎一番と鍵を合せて入乱攻戦ふ城中より是を見て唯二三日の糧有て籠城してもとても死ん命いざ打て出討死せんと門をひらき突て出又前後より攻戦ふ今度は後攻の勢もまし城兵も必死になつて戦へは毛利勢崩色付て見えける所を直家の旗本を進めて爰をうてもものともと大聲に下知して突立れば毛利勢叶はず惣崩となり逃て行三村元親上田實親返し合て戦ひしか元親は深手負て家人



の肩にかゝりて引退く實親は終に討死し宇喜多の兵お首をとられける大將元清もふみ留りかへせしと下知まければ敗軍の勢も是にはけまされて取てかへし其勢一千二三百人集りければ即備をれし立てひかへければ直家も是を見て人數をまどめ勝鬨をあけて早々兵を引上げる其日宇喜多方へ討取首數六百八十餘級とふるるしけるも直家も味方の城々に兵を加へ守らせ兵糧をこめて備前へ歸陣あれは毛利元清も兵を引て入よける

### 尼子勢と毛利勢と作州合戦宇喜多勢加勢の事

かくて尼子勝久は永録十二年の夏出雲伯耆の味方を集め隠岐國へもれし渡り出雲へ入國やかて作州へも出陣あるべき催し有ければ以前尼子方なりし美作國の三浦收玉串市芦田等發起し高田の城を攻破り毛利家より籠りたる津川土佐壇上與太郎山名權平等を取討て其跡に籠城しけるを又毛利家の杉原播磨守是を攻落して已か兵卒牛尾足立國術等を置て守らせけるが此度尼子勝久本國へ歸入し事を聞て三浦等力を得て又高田の城を攻む依之毛利家よりも加勢として香川左衛門光景嫡子少輔五郎廣景次男兵部少輔春繼五百余騎高田の城へ入にける三浦芦田玉串收等是をみてとて小勢にては攻取かたく思ひて備前の宇喜多へ加勢を乞

ければ則長船又右衛門岡剛介沼本新左衛門に四千余騎を附てさし遣す三浦收玉串等此備前勢を合て是を攻けれ共城兵大勢よて防戦すれば落べき様なしまかるに城中に熊野彌七郎佐伯七郎次郎とてとも尼子の臣なりければ是をかたらひ内通して熊野は兵糧藏に火をかけて城を出て寄手に加る佐伯は隠謀あらはれて殺されぬかゝる騒ぎとも城中に有ければ其慮も乘て玉串收等一千余騎十月五日高田の山中へ押寄せ放火す城よりも出て防戦す城兵の乃美修理村岡源左衛門香川宗右衛門などいふ者を討ち取て引取ける其夜玉串收芦田等備前の加勢長船岡等も城を攻る手段をはかり合せいざ明日は伏兵を置小勢を以て餌兵として敵を引出して討へしと謀し合せ明れば七月六日備前城三千余人を久瀬といふ處に三手よ作りて三ヶ所に伏兵として置久瀬山に相圖の旗を上させ玉串監物脇則收勘兵衛清冬兩勢を餌兵と定て城下へ押ひかふしかるに城中よりも今日は伏兵を置て働き出て寄手を討取らんと牛尾太郎左衛門足立十兵衛品川市右衛門門田彌四郎香川右衛門同石見芥川江戸村間等五百余騎是も三手よ分て城下よ伏置けるか何として寄手よ聞けるか是を知て玉串收等其伏を置たる真中へ鉄炮を揃て打かけ續て鎗を入突てかゝれば牛尾足立等思がけなく不意を討れ伏勢小勢よてあり立足も



なく打負て引退く玉串牧勝に乗て追行又城兵兼て儲置し兵卒切て出て玉串牧と  
戦ふ兼て謀し事なれば玉串牧打負て弱々と引て行く敵は利を得たりと追かけて  
不覺小坂一ツを追越ける所を時分よしと山上より相圖の旗を出せは長船岡沼本  
の伏兵三手よ分て鼓を打鬨を作て切てかゝれば高田城兵一合もせずくづれ立伏  
兵の人数は多しまきりに追て是を討香川右衛門勝雄かくて引取らば不殘討とら  
るへし吾こゝにて討死せんそのひまにみな引取と下知して取て返し切合て討死  
す門田彌四郎繼久錢櫃佐介も是あつゝきて戦て討死し其外残りすくなに討なさ  
れて城へ引取ける此時既に寄手城へ付入にして乗取べく見えし所に城に残りた  
りし香川左衛門光景嫡子廣景次男兵部少輔春繼宗像三郎左衛門原田又右衛門芥  
川七郎村間新左衛門塚脇十太夫江戸三郎五郎以下廿余人突て出て是をふせく小  
勢なれば備前勢引包て是を討けるよ大半討れ残ものは麓なる柵の中へ入りける  
を其柵木二十計引破て討てかゝる討殘されし六騎又四騎被討今は香川兵部少輔  
宗像三郎左衛門と二人計になりけるかまはし息をつがんと薄の一村枯立ける  
かけに休らひける備前勢も戦つかれてひかへたる所へ玉串監物かけ來り一丈計  
の槍を提げ郎等二人またかひて突てかゝれば一村薄のかけより香川兵部少輔春繼

と名乗て突て出つ吾は玉串監物脇則と名乗合て槍を合せ暫戦けるか玉串か草摺  
をかけて細腰へ槍を突込めは玉串小膝を折て倒るゝ所を香川押へて頭をどる監  
物か郎等一人は宗像三郎左衛門突伏せ今一人は猿渡壹岐守れればせに來りて  
突伏せ首を取て城に入にけり又牧勘兵衛か手へは香川佐渡同石見返し合せ戦て  
香川兵部少輔ととも城お引入ける玉串監物か兵卒も大將討れければ散亂し牧  
も備前勢の長船岡沼本も皆引取て其日の軍は果おけり此時玉串と香川が槍を合  
せたる所を一町四方作毛もせずして香川か鎧場とて今も殘れる其後も備前勢長  
船又右衛門岡平内富川平右衛門等作州も在陣して城を攻合戦迫合止時なし、明る  
元龜元年備中へ直家出陣われは是等の人数を引取て花房助兵衛職之お兵をつけ  
て祝山の城お籠め毛利勢を押へける

此時直家より富平岡平長又と書たる三人へ連名の下知狀戸川家に今に傳て敵  
通ありといふ其頃氏と名を一字宛狀に書こと諸家よはやりし事也

### 出雲國秋上綱平備中働井毛利勢働出る事

出雲國より秋上三郎左衛門綱平二千余騎を卒して出陣し尼子勝久より直家をた  
のみ來りければ是も元龜元年正月月中旬備中に出陣直家と秋上綱平と一つになり



て所々放火し高山幸イの城を取圍てしきり攻ければ城主石川降参す其勢にて石賀安達等も皆降りける是等の降人の士を先鋒として皆部の城をせむ皆部久之亟といふ精兵の射手よく防く一矢に二人三人射殺ければ城も即時に落されけり直家兵を分けて天王山の城を乗とらんと下知すれば皆部よりも人数を出して爰をも助て防戦しまはし籠城したれども終ふは守り得ずして是も降参すれば此城には大加駿河守を籠め置其外國中の事とも下知し降人の人質とも取て直家も秋上網平も開陣す扱松山の城主庄高資其子兵部大輔勝資同右京を植木下総守秀資津々加賀守福井孫六左衛門等尼子に属して三千五百余騎國中又打出鴨形の細川をはしめ二三ヶ所の城を攻落し是より竹の庄を攻んとす此由とも藝州へ注進ありければ元清八千余騎を卒して備中國に出陣三村元親を先陣として先山城の庄高資を一時攻に攻落し男女百余人を切捨て國中此間敵又降ける者を一々に攻とらんと擬しければ降参する者多く植木庄か類みな雲州へ落行けるなかに齊田城の植木資留計城を守て有けるをも方便て討果し元清猿懸城に在て備中を治て又國中毛利家に属しけり

## 宇喜多金光與次郎宗高を殺す事

御野郡岡山の城主金光與次郎宗高近年直家の麾下有けるか此頃直家に叛くよし風聞ありし處に金光が家來ふ後藤某といふ者あり此者をかねて直家懇にして沼の城へも度々よびて碁の相手とすまかる處に此後藤罪ありて金光殺害す直家は是を聞て大に怒て先手明禪寺軍の後は直家に敵しがたくて味方に属すといへども内々おは叛心を懐くもゑに後藤か直家に懇なるを惡て罪なきに殺害す其儘捨置なはあしかりなるとて元龜元年の夏宗高を沼の城へ呼て切腹を言付らる宗高是を陳謝すれども更に直家許容なくさて宗高最期に及て直家下知して死後子供に所領を與ふべし左われは城を異義なく渡すへしといふ事認め置べきなりとあり是又異義に及がたく書狀を書て後切腹をたり則岡山の城請取を富川平右衛門に申付られしに富川か與力訴訟して金光が家人若相背なは富川與力六十人計よてはふみしつめかたし殊に敵地に近き所なれば如何といふ馬場十介是を聞き岡山は成程危き場なり餘人は心もとなし某にまかせられよ與力召連罷越城を請取候て直み城をも持かたむへしと望ければ直家は是を聞富川馬場兩人をさし向らる與力百廿人連て岡山へ往て宗高か書置たる狀を家來よ見せ直家に降り仕なは本地相違なく宛行へしとありければ一族家臣異義なく同心して城を渡しければ富川



馬場直に城に在番して守りける  
按ふ此金光與次郎宗高は實能勢修理か弟にて法名を友讃といふ其時迄は宗高  
か菩提寺岡山に有りて金光山岡山寺といふ今磨屋町にある観音坊則是なり其與  
次郎か子宇喜多に仕て金光文右衛門といふ宇喜多の家亡て後古松村の民間に  
隠れしといふ

備前軍記卷第三終

明治卅一年三月廿八日印刷  
明治卅一年四月六日發行

非賣品

著者 土肥經平

著者相續人 岡山縣岡山市大字門田屋敷百六番邸 伊木忠行

發行者 全縣邑久郡朝日村大字久々井五十番邸 小橋藻三衛

發行者 全縣和氣郡熊山村大字千麻拾三番邸 南爲吾

發行者 全縣和氣郡片上村大字東片上百十三番邸 野吹秀太郎

印刷者 全縣岡山市大字榮町二十一番邸 吉田朔七

印刷所 全縣全市大字全町全五十番邸 岡山活版所



